

2016年8月1日

みずほディーラーズアイ (2016年8月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 98.00 ~ 105.00

国際為替部 為替営業第二チーム 矢野 正東

■ 先月の為替相場

7月のドル/円相場は本邦経済対策期待から上昇も、戻りは限定的だった。月初、103円台前半で取引を開始。5日は日経平均株価の下落や米金利の低下により101円台後半まで下落。さらに、米5月製造業新規受注などの悪化も重なり、101円台前半まで水準を切り下げた。翌6日もアジア・欧州株の下落からリスクオフムードが強まり、ドル/円は下げ足を早めて100円台前半まで下落した。その後、米5月貿易収支や米6月ISM非製造業景況指数の改善から反発し、米6月雇用統計が市場予想を上回ったことから101円台前半まで上昇。しかし、利益確定売りから、一時99.99円まで下落した。

月央は堅調な展開。米6月雇用統計の良好な結果や本邦参院選挙での与党大勝による経済対策期待の高まりから日経平均株価が大幅上昇すると、ドル/円も買い優勢となり105円近辺まで上昇。さらに、14日には本田前内閣官房参与が4月にバーナンキ前FRB議長と永久国債発行を議論したとの報道から日銀の追加緩和期待が高まり、106円近辺まで水準を切り上げた。15日は仏ニュースでのテロを受けて上値を押さえられる場面も見られたが、中国の4～6月期GDPの堅調な結果などを材料に続伸し、106.32円まで上昇した。ただ、その後トルコでクーデターが発生するとリスクオフムードから円買いが加速、104.63円まで反落した。週明け18日、トルコでのクーデターが鎮圧されたことから再びリスクセンチメントが改善するとドル/円は反発。20日に本邦政府が「事業費20兆円超の経済対策を検討している」と報じられたことから続伸すると、21日には月中高値となる107.49円まで上昇。しかし、海外時間に入り、黒田日銀総裁の「ヘリコプターマネーは必要性も、可能性もない」との発言が報じられ、105円台ミドルまで急落した。翌22日には「本邦経済対策の規模が20～30兆円規模になる可能性」との報道や29日開催の日銀金融政策決定会合での追加緩和期待から反発し、再度106円台を回復した。

月末にかけては値動きの荒い中、上値の重い展開。26日には本邦経済対策に対する過度な期待感が剥落し、一時104.00円まで下落。27日、「経済対策の事業規模27兆円」、「50年債発行の可能性」とのヘッドラインから106.50円近辺まで急上昇するも、その後財務省から50年債発行に関する報道否定が伝えられたことから105円台前半まで急落した。27日のFOMCはサプライズなく通過するも、29日の日銀金融政策決定会合で追加金融緩和が決定されたが、事前予想の範疇であったことから失望売りに押され続落。102.04円で越月となった。

■ 今月の見通し

今月のドル円相場は「上値の重い展開」を予想する。

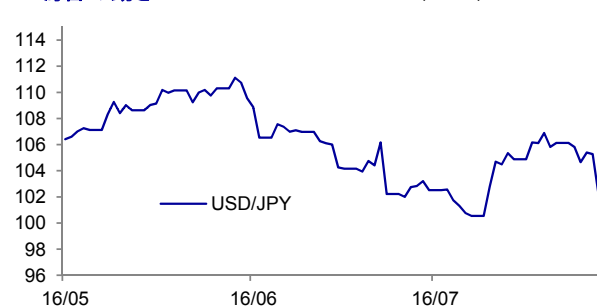
米国では、5月雇用統計の悪化や英国民投票によるEU離脱(Brexit)を受けて急速に高まった利上げ見送りムードも、6月雇用統計の堅調な結果やBrexitに対する過度な悲観論の後退から徐々に落ち着きを取り戻しつつある。7月27日開催のFOMC声明文でも「景気に対する短期的なリスクは低下した」と言及され、次回会合以降での利上げの可能性を残した格好となったが、ドル/円相場への影響は限定的に留まっている。また、短期金利から見る利上げ織込みは然程進んでいないことから、市場参加者の多くは依然、早期利上げに対して慎重な見方をしているものと思われる。

日本では、先月10日の参院選で与党が改選過半数議席を獲得する圧勝となり、同27日には事業規模28兆円超となる経済対策案が公表された。さらに、注目された日銀金融政策決定会合(7月28・29日開催)では、①「ETF買入れ額の増額(年間約3.3兆円から約6兆円)」、②「成長支援資金供給・米ドル特則の拡大(現行120億ドルから240億ドル)」、③「米ドル資金供給オペ担保となる国債の貸付制度新設」という追加緩和が決定され、デフレ脱却に向けた協調姿勢が示された。しかし、日銀はこれまで市場予想を超える「サブプライズ」を演出し続けてきたことから、今回の決定は「金融政策の限界」を印象付ける内容と捉えられ、より大胆な追加緩和を期待していた向きからの失望売りに円高が進行している。

米国では次回FOMC(9月21・22日開催)までにジャクソンホール会議(8月26日)と2回の雇用統計の公表が控えている。再び雇用統計が堅調な結果となれば、前回FOMC声明文に見られたように良好な労働環境を背景とした景気判断の上方修正に一段弾みが付くこととなり、これまで慎重な見方となっていた9月利上げに対する期待感が高まることとなろう。ただ、引き続き本邦投資家の外債投資需要が旺盛なことから、前回利上げ(2015年12月16日)時と同様、利上げ観測の高まりに伴う金利上昇の滞空時間はイールドハンティングの動きから短期間となることも想定される。この場合、日米金利差は然程拡大せず、ドル/円の上昇は限定的に留まる可能性が高い。本邦では特段材料となるイベントは見当たらず、また夏季休暇に伴う市場参加者の減少により、所謂「夏枯れ」となりやすい。Brexitに伴う景気への悪影響も未だ払拭されたとはいえ難く、また先月までの地合いを大きく好転させる確固たる材料は見当たらないことから、今月は総じて上値の重い地合いが継続すると見ている。

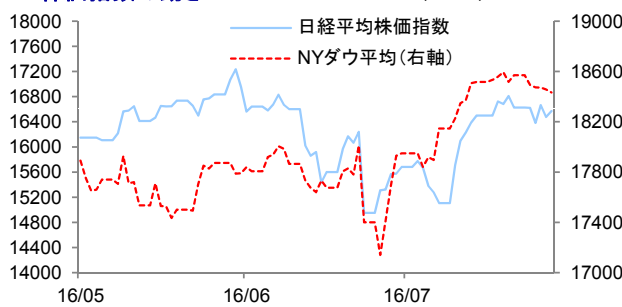
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	全国CPI (前年比)	5月	-0.5%	-0.4%	-0.3%
7/1	日銀短観	2Q	4	6	6
7/1	米ISM製造業景況指数	6月	51.3	53.2	51.3
7/6	米ISM非製造業景況指数	6月	53.3	56.5	52.9
7/7	米ADP雇用統計	6月	160K	172K	168K
7/7	米雇用統計	6月	180K	287K	11K
7/10	参院選挙	-	-	-	-
7/27	米FOMC (政策金利)	7月	0.25-0.50%	0.25-0.50%	0.25-0.50%
7/29	全国CPI (前年比)	6月	-0.4%	-0.4%	-0.4%
7/29	日銀金融政策決定会合	7月	ETF買い増し、成長資金・米ドル特則総枠拡大		

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (5名、102.00～111.00、中心102.00～108.00)

藤崎	102.00 ～ 110.00	本邦における政策効果期待から投機筋の円買いポジションがアンワインド継続を予想。旺盛な直接投資や対外証券投資も戻りを試すサポート材料。フローに着目すれば大きな不均衡は生じておらず、これまでの急激な円高進行の速度調整が必要。
加藤	102.00 ～ 111.00	政府・日銀が物価目標の旗を降ろさないことが明らかになった今、現状に加えて更なるデフレ脱却の方策が求められるし、期待インフレ率を高めるためにそれを実行に移していくものと予想する。
佐藤	102.00 ～ 108.00	堅調な米経済指標や金融市場の安定を背景に、米利上げ期待が高まりやすい。日銀金融政策決定会合後もドル/円の下値が限定的なこともドル買い安心感が拡がりやすいだろう。26日にジャクソンホールで開催される金融・経済シンポジウムでのイエレンFRB議長講演に向けて底堅さを確認する展開か。
尾身	103.00 ～ 108.00	年内残された米利上げへの期待、本邦財政政策による景気浮揚期待などから上昇基調がサポートされると予想。ただし、今月中盤までは夏休み相場の為、本格的な上昇は26日ジャクソンホール以降に期待する。また、閑散相場の為、大口フローの動向や他相場の急変動に連れた乱高下には注意したい。
西谷	102.00 ～ 108.00	BOJ後も、懸念された程円高が進まなかったのは大きい。今月は米国の材料に引っ張られると考えており、米7月雇用統計を始め、米経済指標の堅調な結果が続けば、月後半に予定されているジャクソンホールでのイエレンFRB議長講演に向けて、利上げ期待が高まると予想する。緩やかなブルスタンス。

■ドル・ベア (6名、97.00～107.00、中心98.00～107.00)

山下	97.00 ～ 107.00	日銀の追加緩和決定も小規模なものに留まったことで、円高トレンドは継続。市場の次なる焦点である米利上げについても、今月開催のジャクソンホールでのイエレンFRB議長講演で時期について言及がなければ更に円高進行の可能性も。
矢野	98.00 ～ 105.00	米雇用統計やジャクソンホールから利上げ観測が高まろうとも、昨年12月の米利上げ後と同様、イールドハンティングの動きから日米金利差が拡大する時間帯は短く、上昇余地は限定的。また、Brexitに伴う景気悪化リスクが払拭されたとは言い難いことも重石となり、大きく地合いが好転するには至らないだろう。
高田	98.00 ～ 107.00	市場のリスクセンチメントは総じて改善しているものの米債利回りが低迷する環境下、ドル/円は上値の重い展開か。堅調な米経済指標を受けて利上げ観測が台頭すればドル/円は上伸するであろうが、今秋に控える米大統領選挙も意識され反応は一時的であろう。
西島	98.00 ～ 107.00	日米金融政策イベントを通過し、ドル円は落ち着きどころを見出せず浮足立った相場付きのまま夏枯れ相場へ突入。一旦大きく萎んだ米追加利上げ気運の再燃はうかがえない。日銀の追加緩和はインパクトに欠け、本邦経済対策への期待も効果への不透明感が募れば早期に円高トレンドへ戻る展開か。
下山	98.00 ～ 107.00	低迷している米国の年内利上げ観測は、大統領選挙も控える中で今後も高まりづらいだろう。本邦の追加緩和観測も、7月末の緩和措置は小規模であり今後円売りを本格的に仕掛ける投機筋は少ないと思われる。投機的なフローや本邦輸出企業の円転フロー等が強く上値を押さえよう。
森谷	98.00 ～ 106.00	7月中旬以降、本邦政策期待・追加緩和期待等から反発する局面もあったが、追加緩和の内容は比較的小規模であり、円高の流れが再開すると予想。7月FOMC声明文の内容も早期利上げ期待を高める結果にはつながっておらず積極的なドル買いは見られないと予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0500 ~ 1.1300
EUR/JPY 110.00 ~ 117.00

国際為替部 為替営業第二チーム 山下 智子

■ 先月の為替相場

先月のユーロ/ドルは、1.10台半ばを中心とした方向感のない値動きに留まった。月初、1.11台前半でオープンしたユーロ/ドルは、4日にユーロ圏7月投資家信頼感指数が18か月ぶりの低水準となったことを背景に1.10台後半まで下落したが、スイス国立銀行(SNB)のユーロ買いフラン売りの介入観測が浮上すると、1.11台前半まで値を戻した。5日にかけてユーロ/ドルは1.1187まで急伸するも、その後はドル買い優勢地合いとなり、1.10台後半まで反落した。6日、米5月貿易収支や米6月非製造業景気指数は市場予想を大きく上回ると、1.1029まで下落。しかしその後はNYダウ平均が上昇し、ユーロ/円が買い進められると、1.11台前半まで連れ高となった。7日には欧州委員会がスペインとポルトガルが財政赤字をGDPの▲3%未満とするEUの財政ルールに違反したため、制裁措置を勧告したとの報道にユーロ売りが強まると、1.10台後半まで下落した。翌週に入り、メイ内相の英首相就任が決まり、ポンドが上昇する流れにユーロも1.10台後半まで上昇するも、ドル買い地合いに再び1.10台前半まで反落した。14日には英中銀(BOE)の予想外の政策金利据え置きを受けてポンドが急伸するとユーロも一時1.1165まで連れ高に。その後は好調な米経済指標を受けたドル買いに1.10台後半まで反落も、15日には1.11台回復で動意に乏しい推移となった。翌週、1.10台後半でオープンしたユーロは、ユーロ/円の上昇などに連れて1.1085まで上昇した。その後はドル買いが強まると1.10台半ば近辺まで反落。19日は、独7月ZEW景況感指数の悪化やトルコのアンカラで爆発(その後、火事と判明)との噂を受けてリスク回避ムードが強まり、1.10近辺まで下落した。20日にはドル買い優勢地合いの展開にユーロは1.0980まで値を下げるも、翌日にECB理事会を控えユーロを買い戻す動きも見られ、1.10台前半で推移した。21日のECB理事会は、予想通り金融政策を維持したものの、追加緩和は9月以降の会合となる可能性が示唆されると、一時1.10台後半まで上昇した。しかし、追加緩和観測が燃る中、上値を追う動きは限定となり、1.09後半まで下落した。25日には独7月IFO景況感指数の良好な結果や欧州株の堅調推移を背景に、1.09台後半まで上昇。27日は、FOMCの結果を受けたドル買いに1.09台半ば近くまで下落するも、その後ドル売り優勢地合いになると、一気に1.10台後半まで急伸。その後、28日にかけて1.1121まで上昇したものの、1.10後半に押し戻される展開。しかし、29日の日銀金融政策決定会合で小規模な追加緩和に留まったためにドル/円が急落すると、ドル売り地合からユーロは1.11台を回復した。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は上値重い展開を予想する。

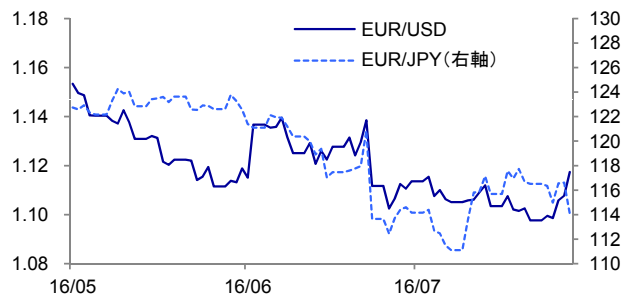
先月のECB理事会では金融政策の現状維持が決定された。英国民投票でのEU離脱(Brexit)派勝利を受けての影響を計る経済指標が出揃っており、ECBも9月の経済見通しまではEU離脱の影響を検証することはないとしている。また、英中銀(BOE)が利下げ見送りを決定したことや流動性が低下する夏相場にも配慮した結果の政策決定であろう。しかし、9月のECB追加緩和はもはや避けられない状況と考える。イタリア第3位のモンテ・パスキ銀行の資本不足問題では、先月19日の欧州司法裁判所による見解について、市場はイタリア政府が公的資金注入の場合には株主が減資の負担を負うと判断、欧州株全般が売り込まれる場面もあり、先月29日に発表されたEBA(欧州銀行監督機構)による欧州銀行のストレステストの結果も可否判定はなされなかったものの、昨年の中核的自己資本比率(5.5%)に届かなかった銀行も出てきており、EBA会長も健全だと宣言できるまでには至っていないと発言、欧州金融セクターへの懸念も残る。

ギリシャ政府は先月20日迎えた国債の償還を終えたが、6月に受け取った救済金を活用しただけであり、遅々として進まぬチプラス政権の財政改革にIMFとEUとの間で認識の相違も出てきており、未だギリシャ問題も燦々続けている。また、Brexitにおいても、とくに英国経済の後退が問題視されているが、英国を失うEU経済の先行きも不透明である。実際のところ、直近のユーロ圏経済指標ですら、英国民投票前のものにも関わらず、総じて芳しくなく、ユーロ圏のインフレ期待は引き続き低下基調である。さらに、トルコでのクーデター未遂では1万人を超える軍関係者や警官が罷免されている。イスラム国との国境警備がおぼつかない状況となれば、過激派組織のユーロ圏への流入に歯止めが効かなくなり、テロ事件の勃発も懸念される。ユーロ圏の地政学的リスクの高まりは、フランスでのテロ事件でそうであったように、消費者心理を冷え込ませ、内需の落ち込みを引き起こすこととなろう。

なお、ECBの緩和政策は預金ファシリティ金利を始めとして限界に近づいており、そう易々とは追加緩和に踏み切れないとの見方もあるが、ECBの主要金利は長期に渡り現行水準もしくはそれを下回ると当局も見込んでいる。そのため、ユーロ圏を取り巻く状況に鑑み、ECBは限界ギリギリまでの政策変更を強いられている。明るい材料が見当たらず、9月ECBでの追加緩和が必至と考えれば、現状のユーロのレベルは高すぎると言わざるを得ない。

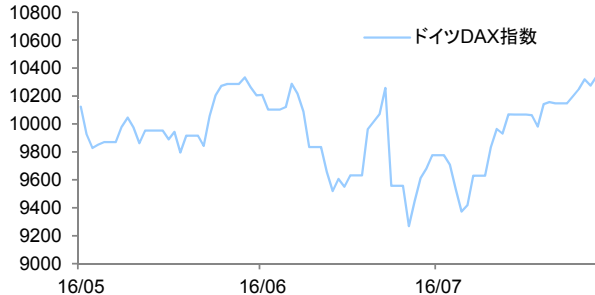
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	欧 PPI	5月	0.3%	0.6%	-0.3%
7/5	欧 小売売上高(前月比)	5月	0.4%	0.4%	0.0%
7/15	欧 CPI	6月	0.1%	0.1%	0.1%
7/19	独 ZEW景気期待指数	7月	9.0	▲ 6.8	19.2
7/20	欧 経常収支(季調済)	5月	-	EUR15.4BEUR34.0B	
7/21	欧 ECB預金金利	7月	-0.4%	-0.40%	-0.4%
7/21	欧 ECB貸出金利	7月	0.25%	0.25%	0.25%
7/25	独 IFO企業景況感指数	7月	107.5	108.3	108.7
7/29	欧 GDP(前年比・季調済)	2Q	1.5%	1.6%	1.7%
7/29	欧 失業率	6月	10.1%	10.1%	10.1%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (3名、1.0900～1.1350、中心1.0900～1.1300)

佐藤	1.0900 ～ 1.1300	BREXITによるユーロ圏景気の先行き不透明感の高まりが警戒されたものの、金融市場の安定を背景に足許ではユーロの下値不安は後退しつつある。米利上げ期待が再び熾ぶり始める中、ECBが早急に追加金融緩和に動くことは考えにくく、8月は戻りを試す展開を予想したい。
尾身	1.0900 ～ 1.1200	BREXITの影響が心配されるEURだが足元経済指標の悪化は限定的であり、また低インフレであることが材料視され、下がりづらい展開が継続すると予想。但し、米利上げによるドル高傾向を勘案すると一段の上昇は押さえられ、現行レベルにて膠着した状態が継続するだろう。
西谷	1.0950 ～ 1.1350	BREXITへの懸念が依然として熾っている状況には変わらないが、想定よりも早くメイ氏が英首相に就任したりと、足許のマーケットに決定直後のような悲壮感はない。ECBについても緩和スタンスは崩していないが、拙速に追加緩和に踏み切るといった様子でもないため、ユーロは底堅い推移を予想する。

■ ユーロ・ベア (8名、1.0500～1.1300、中心1.0600～1.1200)

藤崎	1.0500 ～ 1.1300	BREXITに向けた不透明感、イタリア大手銀行の不良債権問題などを材料にユーロの上値は重い。そうした中、米利上げ観測が後退するきっかけとなった米雇用統計には引き続き注意が必要。2か月連続で強目の数字となれば、ドル買い戻しに拍車がかかるだろう。
加藤	1.0500 ～ 1.1200	英国の次はイタリアが注目される可能性が高い。レンツィ退任ともなれば国内で混乱が避けられない。ユーロ離脱とはいかなくとも、通貨ユーロに対する下押し圧力はかかり続けると考える。
山下	1.0500 ～ 1.1200	イタリア大手銀行の資本不足問題や、トルコクーデター未遂など多発するテロ事件によりユーロ圏のリスクセンチメント悪化し、次回ECB理事会では預金ファシリティ金利を下げることが予想される。そのため、投資家のユーロ離れは進むと考える。
矢野	1.0600 ～ 1.1200	BREXITに続き、イタリアを始めとする近隣諸国でも不穏な動きが強まっていることから、ユーロが買い進まれることは難しい。また、ECBによる追加金融緩和の可能性も想定されることから、ユーロの上値は重いと予想する。
高田	1.0700 ～ 1.1200	英国経済及び中国経済の先行き懸念などからECBによる追加緩和の可能性は否定し難く、要人発言などで緩和が示唆されるような場面ではユーロの上値は重くなるであろう。金融システムや財政に関して、南欧諸国では不安要因も熾ぶっておりユーロは下げ易い展開か。
西島	1.0600 ～ 1.1200	BREXIT決定後、想定されたほどのユーロ圏域内の景況感悪化していないものの、イタリア大手銀行への資本注入を巡る問題などネガティブな材料が散見され、またECBの追加緩和への思惑が熾ると想定されることから、ユーロは上値重い展開を予想する。
下山	1.0700 ～ 1.1300	BREXITの余波は一旦は沈静化している印象も、結局のところECBの追加緩和観測は熾り続けるだろう。一方、ECBによるマイナス金利導入が欧州金融機関に与える悪影響も顕在化してきており、欧州経済に対する悪材料は少なくない。よって、ユーロは徐々に下落する展開を予想している。
森谷	1.0600 ～ 1.1200	BREXIT決定がもたらす悪影響やイタリア銀行の不良債権問題など、ユーロ圏経済の先行きについては不透明感が強く、ユーロの上値は限定的となると予想。ECBへの追加緩和期待に加え、ボンドの上値の重さもユーロ売り材料として意識されるだろう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2950 ~ 1.3450
GBP/JPY 130.00 ~ 140.00

欧州資金部 本多 秀俊

■ 先月の為替相場

7月のポンド相場は、6月のEU離脱投票後の安値を更新する下押しが先行。月央に掛けて主要通貨に対し明確な反発を見せたものの、振り返って、歴史的な安値水準における軟調推移を抜け出すには至らなかった。EU離脱投票後の急落から、安値圏での膠着へと移行していたポンドが一段と水準を切り下げたのは、5日、複数の英不動産ファンドが殺到する払い戻し請求に対応し切れず、払い戻しを停止したことがきっかけとなった。6日までにポンドは、対ドルで1.2798、対円で128.82円、対ユーロで0.8629と、それぞれ1985年6月、2012年11月、2013年8月来の安値を更新した。8日発表された6月雇用統計は、非農業部門雇用者数が287千人増と市場予想を明確に上回り、ドル全面高を招いたものの、ドル買いは長続きしなかった。11日以降は、投資市場全般のリスク許容量の高まりがポンド反発を促したものと考えられた。保守党党首(=英首相)選の最終候補の2人に残ったレッドソム燃料閣外相が、突如辞退を発表(11日)、メイ内相の党首当選/首相就任が確定した(13日に就任)。9月まで続くと思われていた英政局の不透明感が2か月短縮されたことが好感された。また、前後して、「日本政府が永久国債を発行する(それを日銀が直接/間接に引き受ける?)」との観測や、「英中銀が7月利下げに踏み切る」といった思惑が広がったことも、市場のリスク許容量を高めたようだ。果たして、14日の英中銀金融政策委員会は利下げも資産購入額の上限引き上げも見送った。金融緩和見送りを単純にポンド買いと読むか、緩和観測がポンド反発を促してきた経緯から逆にポンド売りを読むかは微妙な判断だったが、決定発表後、一時的に上昇しただけで、その後ポンドがほぼ一貫して軟調に推移した経緯からは、後者の読みがうかがえた。15日以降のポンド軟調推移には、同日、英中銀金融政策委員会のホールデン委員の「8月緩和に投票する」との発言が伝えられた影響も加わった。もっとも、その後、英中銀からは、同ウィール委員が「8月利下げにはより堅固な(英景気減速を示す)証拠が必要」(18日)、同フォーブス委員からも「EU離脱による霧(不透明感)が晴れるまで利下げは待つべき」(21日)と利下げに消極的な発言も相次いで聞かれたが、ポンドの軟調推移は変わらなかった。並行して、日通信サービス会社による英半導体設計会社の巨額買収合意(18日)が伝えられたことも、ポンドには下支え材料と読めたはずだが、少なくとも合意発表後の値動きからは、そのような動きは読み取れなかった。

■ 今月の見通し

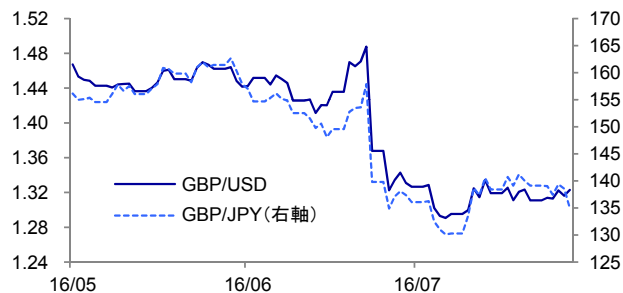
8月のポンド相場は、現行安値圏での軟調気味の膠着を予想。ポンドの先行きを巡っては、英のEU離脱交渉の進展が気になるところだが、現時点で、EU側はリスボン条約50条(離脱申請)が発動されるまで一切の交渉には応じない姿勢を明確にしているし、米も英がEU加盟国である間は単独の通商交渉は始められないとの立場を明確にしている。そうは言っても、なんらかの予備交渉が水面下で進む可能性は除外できないが、8月は欧米政治も休暇の月で、進展は見込み難い。進展が期待できないということは、悪材料も好材料も聞かれる可能性が低いわけだが、当面は、好材料にポンドが反発する展開よりも、悪材料にポンドが続落する展開に飛びつき易い非対称な環境が支配的になるものと見込まれる。膠着を中心に、取って選ぶなら、やはりポンド軟調を警戒するのが妥当かと思われる。個別要因では、まずは英中銀の金融政策動向に注目。もっとも、EU離脱投票の影響が7月の経済指標に表れたとしても、4日発表の金融政策委員会までに入手可能な7月指数は限られている。EU離脱交渉は今後2年以上を要する長丁場になるはずで、各種PMIのような景況感を反映した指標の7月指数だけを手掛かりに、利下げという「虎の子」の手札を早々に切ってくる可能性は高くないのではないかと。仮に「市場の期待」に応える必要を感じるのであれば、他のツール(資産購入額上限の引き上げ、購入可能な資産の多様化、成長の為の貸出支援策の拡充など)に訴える可能性の方が高いものと見込む。ただ、7月の利下げ見送り決定後のポンドの値動きに見られたように、英金融緩和の有無とポンドの値動きの関係は現時点で明瞭とは言えず、金融緩和の有無・内容がポンドにどのような影響を及ぼすか判断は難しい。その点、同時に発表される英中銀四半期インフレ報告書に、英中銀の中期的な金融政策運営姿勢が読み取れるのであれば、積極的な緩和姿勢にポンド売り、慎重な緩和姿勢にポンド買いと素直な反応が予想できよう。8月緩和の有無にかかわらず、今後発表される英経済指標は、EU離脱投票の英経済や英中銀金融政策への影響を推し量る上で注意が必要。とりわけ16日の英7月消費者物価指数、18日の英7月小売売上高といった経済実態を示す7月指数には注目しておきたい。また、5日のハリファックス7月住宅価格(前月比)、10日の王立不動産鑑定士協会(RICS)7月住宅価格など住宅関連指標にも注目。先月ファンドの解約停止で話題に上った商業用不動産よりも、価格変動が見え易い住居用不動産の動向は、EU離脱投票の影響を測る上で重要な目安になるのではないかと。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』
お風呂を、日本の温泉や銭湯のように「社交の場」と捉える考え方は勿論、「リラックスする空間」と考える人も、英国人には少ないような気がします。会社で簡単なシャワーの施設があるので、通勤するのに走ってきて着替える際に、走ってきた人や自転車で来た人たちとたまに鉢合わせするのですが、彼らのシャワーを浴びる時間の短さにそれを感じます。そもそも湯船にのんびりつかるといふ習慣もあまりないのではないのでしょうか。家賃の安いアパートや安宿などには湯船がなくてシャワーだけということも当たり前のようにあります。イギリス料理が不味いのは、かつて英国人にとって食事とはお腹を満たすためのものであり、美味い不味いは二の次だったからという説があります。お風呂/シャワーが楽しむものではなくて、体をきれいにするためのものという発想も、それに近いのではないのでしょうか。してみると、過去20年ほどの英の食文化の目覚ましい発展は、もしかすると、今後到来する英入浴文化発展を予見させるものかもしれません。そう考えてみると、確かに、近年、「スパ付きのホテル」みたいなものは増えてるような気がします。ただ、仮にお風呂文化が花開くことがあったとしても、おそらくそれは、ロンドンのような大都会や一部のお金持ちの間に限られたものになるのでしょう。実際、食文化の発展といっても、やはりそれはイギリス全土に満遍なく行き渡ったものではないからです。世界中のありとあらゆる食べ物居ながらにして楽しめると言っても、それはロンドンに限られたことに過ぎません。結局のところ、今般のEU離脱投票も、一部の限られた地域/人ただけしか、グローバリゼーションという名の多様化の恩恵を享受できなかったことが大きな要因となったのでしょう。全国津々浦々にスーパー銭湯を設置して、異文化体験を共有していれば、今般の国民投票の結果も違ったものになっていたかも知れません。

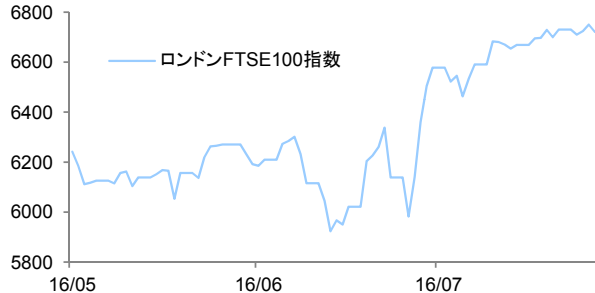
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/7	鉱工業生産 (前年比)	5月	0.5%	1.4%	2.2%
7/7	製造業生産 (前年比)	5月	0.4%	1.7%	1.5%
7/8	貿易収支 (百万ポンド)	5月	-3575	-2263	-1950
7/14	英中銀基準金利		0.50%	0.50%	0.50%
7/19	消費者物価指数 (前年比)	6月	0.4%	0.5%	0.3%
7/20	ILO失業率	3-5月	5.0%	4.9%	5.0%
7/20	週平均賃金上昇率 (前年比)	3-5月	2.3%	2.3%	2.0%
7/21	小売売上高 (含自動車/前年比)	6月	5.0%	4.3%	5.7%
7/27	GDP (前年比)	2Q	2.1%	2.2%	2.0%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7380 ~ 0.7700
AUD/JPY 75.00 ~ 80.80

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

7月の豪ドルは、上に往って来い。

1日、豪ドルは0.74前半でスタートし、じりじりと0.75近辺に上昇。2日の豪総選挙では与野党が接戦となり、結果判明に数日かかる見通しと発表。これを受けて、大手格付け会社が相次いでネガティブ(財政悪化懸念浮上など)コメントし、豪州の最上級格付けに暗雲が垂れ込み、豪ドルは0.74前半に下落。その後、豪州主要輸出品目の鉄鉱石や石炭価格の上昇より、豪ドルも0.75前半に反転。しかし、5日の豪5月貿易収支や豪5月小売売上高が市場予想を下回る結果となり、豪ドルはじりじりと0.74台に下落。同日の豪準備銀行(RBA)理事会では市場予想通りの政策金利1.75%据え置きが発表されたため、豪ドルは動意無し。7日、格付け会社S&Pは豪州ソブリン格付け「AAA」の見通しを「安定的」から「ネガティブ」に変更。この報道を受けて、豪ドルは一時的に下落するも、すぐに発表前の水準に戻した。翌日、米6月雇用統計にて非農業部門雇用者数が前月比+28.7万人増加(予想:同+18万人増加)と昨年10月以来の大幅増となり、米経済回復期待の高まりから、リスク選好の動きが強くなり、豪ドルは0.75台に浮上。12日、安倍首相とバーナキ前FRB議長の会談内容から、日銀の追加緩和期待が高まり、リスクオンの動きが一段と強まり、豪ドルは0.76台に上昇した。その後、豪ドルは0.76前半を中心に横ばい推移。15日、豪州最大貿易相手国の中国4~6月期GDPが市場予想前年比+6.6%を上回る同+6.7%となり、豪ドルは高値0.7676を付けた。しかし、海外市場にてトルコのクーデター報道により、リスクオフの動きとなり、豪ドルは0.75後半に下落。

19日、RBA議事録では真新しい内容は発表されなかったが、市場では追加緩和観測根強く、豪ドルは0.74後半に下落。その後、27日の豪4~6月期消費者物価指数(CPI)を控えて、様子見ムードが強くなり、豪ドルは0.74台を中心に揉み合い推移。27日、注目の豪CPIは前年比+1.0%(予想同+1.1%)、トリム平均値は同+1.7%(同+1.5%)、加重中央値は同+1.3%(予想同+1.3%)と、トリム平均値が上回り、豪ドルは0.75後半まで急伸する場面があるも、すぐに0.74後半に反落。FOMCでも、今後の利上げに関するヒントは得られず、豪ドルは0.74後半を中心とした推移が続いた。

■ 今月の見通し

「2日(火)のRBA理事会での利下げ有無に注目。」
7月27日(水)発表の豪4~6月期CPIにおいて、RBAが政策運営で注視する基調インフレ率(=トリム平均値+加重中央値)÷2は前年比+1.5%と、RBAのインフレーターゲットレンジ(+2~3%)を下回ったことから、8月2日のRBA理事会での利下げの可能性は高いと考える。しかし、豪短期金利先物市場では8月の利下げが既に55%も織り込まれており、RBAの利下げによる豪ドルの下落幅は小幅なものに止まるだろう。むしろ、利下げが見送られた場合、ややサプライズとなり、豪ドルは急伸するだろう。

一方、米国では7月27~28日にFOMCが開かれ、FOMC声明文が公表された。英国民投票後初めてとなったが、英国EU離脱(Brexit)決定による悪影響は足許見られないことから、「景気見通しへの短期的なリスクは弱まってきた」とリスク評価を修正した。しかし、先行き不透明感が払拭されていない状況は依然変わらず、従来どおり、「海外景気・金融情勢を注視する」との文言は踏襲された。景気認識は上方修正されており、次回9月の利上げの可能性を残した形となったが、米短期金利先物市場では9月利上げは26%しか織り込まれておらず、かかる状況下で利上げを行った場合、金融市場へのインパクトは相当なものとなり、9月利上げは見送られるのではないかと。また、FRBは市場との対話の重要性を説いており、8月26日のイエレンFRB議長とのジャクソンホールにての講演にて米金融政策に関するヒントが得られるかが注目である。

以上のことから、豪州の利下げによる豪ドル下落は限定的で、米国の利上げ観測高まらず、米ドルは売られやすいと考える。豪ドルと米ドルを相対的に比較すると、豪ドル売り圧力の方が米ドル売り圧力より弱いと思われ、豪ドルはやや底堅く推移するのではないかと。

最後に、先月、豪州は格付け会社S&Pの注視対象となったことで、連邦政府が財政赤字に対して改善に向けた姿勢を明確にしなければ、2年以内に1/3の確率で格付けが引き下げられる可能性が出てきた。現状、他の格付け会社より同様の措置は示されておらず、金融市場も落ち着いているが、長期的には格下げリスクが薫っており、豪州格付けに関するヘッドラインには注視したい。

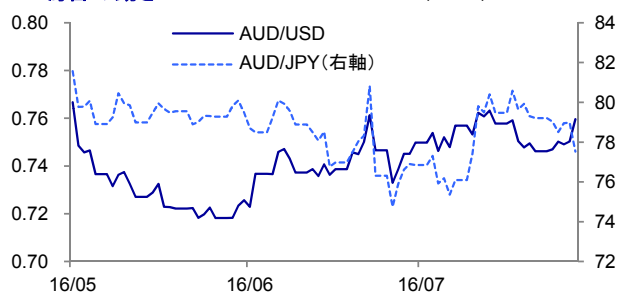
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』
このネタはほとんどネタがないため、非常に困りました。日本と比較して、当地には特別なお風呂事情や温泉等はほとんどありません。メルボルンのペニンシュラ温泉が豪州唯一(?)の天然温泉リゾート地です。近隣のニュージーランドは日本同様環太平洋火山地帯に位置しており、北島を中心に複数の温泉があります。ただし、天然温泉ということもあり、硫黄の臭いがきつくと、豪州人の同僚の好み(好き嫌い)は分かれています。また、豪州の一般的なお風呂のことを伝えようと、シャワーのみの浴室とシャワーに加えてバスタブがある浴室の割合は半々ぐらいです。入浴頻度は、朝晩2回、又は朝1回、平日はシャワーで、休日にバスタブに浸かることが多いみたいです。

シャワーネタから波及して、先日、パース空港でシャワーを浴びました。というのも、RedEyeFlight(目の隈便、深夜出発して翌早朝に目的地に到着する航空便、寝不足から目が充血して赤くなることが名前の由来)に乗るためです。初体験のRedEyeFlightでしたが、恐れていたほどの不快感(疲労感)は無かったです。個人的には、毎回、飛行機の中の映画を楽しみにしているので、フライト中に映画を見るか、睡眠が迷いましたが、映画の見過ぎでレッドアイになったら、シャレにならないと思い断念しました。。。なるなら、セクシーなキャッツアイが良いですね◎

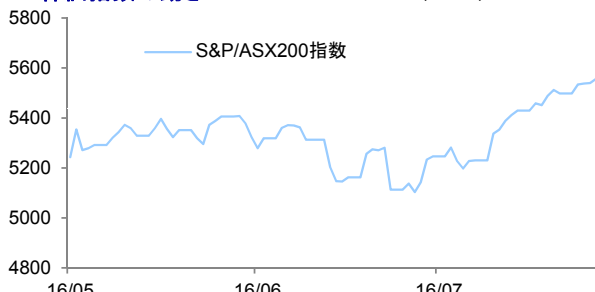
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	貿易収支	5月	▲1700M	▲2218M	▲1785M
7/5	小売売上高[前月比]	5月	0.3%	0.2%	0.1%
7/5	RBAキャッシュレート		1.75%	1.75%	1.75%
7/11	住宅ローン[前月比]	5月	▲2.0%	▲1.0%	1.4%
7/14	雇用者数変化	6月	10.0千人	7.9千人	19.2千人
7/14	失業率	6月	5.8%	5.8%	5.7%
7/19	RBA議事録				
7/27	CPI[前期比/前年比]	4-6月	0.4%/1.1%	0.4%/1.0%	▲0.2%/1.3%
7/27	CPIトリム平均[前期比/前年比]	4-6月	0.4%/1.5%	0.55%/1.7%	0.2%/1.7%
7/27	CPI加重平均[前期比/前年比]	4-6月	0.4%/1.3%	0.4%/1.3%	0.4%/1.3%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2650 ~ 1.3200
CAD/JPY 76.20 ~ 80.80

米州資金部 光野 由貴宏

■ 先月の為替相場

月初、ドル/カナダドルは英EU離脱(Brexit)決定後のリスク回避ムードが後退する中、下値を試す展開となり1.2832まで下落。しかし軟調な原油相場を横目にこのレベルではカナダドル売り意欲も強く、ドル/カナダドルは反発。その後発表されたカナダ6月失業率は予想を下回ったものの、同時に発表された注目の米6月雇用統計で非農業部門雇用者数変化が予想を大きく上回ったことから、再び米利上げ期待が再燃しドル買いが優勢となり、また、米長期金利の上昇に下値をサポートされたドル/カナダは1.3140まで上昇。月中にかけて、1.31台前半ではドル売り意欲も強くドル/カナダドルは反落。アジア・欧州債券市場の長期金利が著しく低下する中、余剰資金が米株式市場に集中。大手米銀などの収益が予想を上回ったこともあり、ダウ平均、S&P500種が連日高値を更新する展開に、ドル買いが先行し1.31付近まで下落。その後、カナダ中央銀行金融政策決定会合を控え、一部利下げ期待が高まっていたことから1.3080まで値を戻すものの、カナダ中銀は政策金利を0.50%で据え置き、ボロズ中銀総裁の会見も“カナダの輸出の回復は堅調”“政府の経済政策も年+0.50%の成長を見込んでいる”とのタカ派発言にドル/カナダドルは下落。15日に発表された米6月小売売上は前月比+0.6%と予想値(同+0.1%)を大きく上回ったこともあり1.2862まで上値を切り下げた。月末にかけては、堅調な米経済指標を受けてドル/カナダドルは上昇。19日の米6月住宅着工件数が予想を大きく上回ったことからドル買い優勢。一方で、今まで低下傾向であった米国の採掘リグ数の上昇やガソリン価格の低下もあり原油先物相場が連日の下落から2か月ぶりに1バレル45ドルを下回ったこともカナダドル売り材料となると、ドル/カナダは1.31台前半まで上昇。22日は発表されたカナダ5月小売売上高、6月消費者物価指数が予想を上回ると1.3057まで下落。しかし同日発表された米6月中古住宅販売件数が予想比プラスとなり、原油先物も4月ぶりに43ドルに割り込むと1.3140のレジスタンスを抜け1.3185まで値を押し戻された。27日に発表されたFOMCでは”短期的リスクの低下”、”労働活動性の上昇”とタカ派な内容にドル/カナダは一時1.3253まで上昇。しかし、最終日に発表されたカナダ5月GDPは、市場予想を下回ったものの、米4～6月期GDPが前期比年率+1.2%と予想(同+2.4%)を大きく下回ったことからドル売り地合いとなり1.3030で月越した。

■ 今月の見通し

7月上旬に発表された米6月雇用統計や米6月小売売上高は上振れ、足許の米経済指標は前回から改善するケースが目立ち、市場では早期利上げが再燃し、素直にドル買いの様相となっている。どこかの時点で米金利上昇が米株市場の頭打ちとなろうが、そのタイミングは直ぐではないだろう。

一方、原油は中東情勢の警戒などから上昇する場面も見られたものの、足許では緩やか調整基調は続き、需給悪化懸念が高まりやすい状況である。100日移動平均線も割込んできたことで、目先の値動きに警戒感も強まりを見せており、節目の40ドルを割込む展開となると世界経済に不透明感が拡がるとの見方から、カナダドルの下押しする一因として意識されるだろう。

来月の方向感としては全体的に軟調な推移を予想。8月に入り夏休みが本格化すればガソリン、原油などの下値サポート材料になるであろう。また多数の米大手エネルギー会社の決算発表時が市場予想を下回り、1バレル40ドル台では利益を出すのは難しいとの見方から現在の41ドル台からさらに供給量を増やすとは考えにくいだろう。

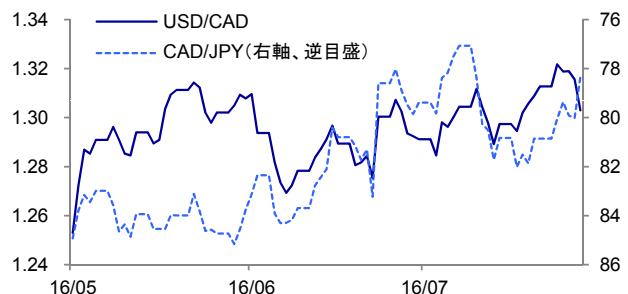
また、カナダ5月GDPは下振れたものの、今回は原油産地都市アルバルタでの自然災害が原因であり、その他の経済指標は引き続き回復傾向となるであろう。そして米4～6月期は予想を大幅に下回った。次回FOMCは9月までないことから、8月に年内利上げシナリオが再燃するとは考えにくく、ドル売りカナダドル買い展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』
温泉、サウナ、仕事帰りのスーパー銭湯、自宅ゆっくりバスロマン…。お風呂好きの日本人にはなんと心地の良い響きでしょうか。想像しただけで溜まった疲れや日常のストレスが和らいで行く様な気がします。しかしここは日本から遠く離れたカナダ・トロント。残念ながらこちらはシャワー文化で、入浴に癒しを求める、入浴を楽しむといった文化は浸透していません。多くの人は朝出かける前にさっとシャワーを浴びてそれでお終いです。オンタリオ州の住民がシャワーにかける平均時間は約5～10分。ジャグジーや個別にバスタブが付いているお家の住人もそれらを利用してゆっくりと湯船に浸かるのはまれで、多くは週1回、平均は月に2～3回位だそうです。カナダは全国に沢山の湖や川が点在しており、特にオンタリオ州は5大湖に囲まれ世界でもかなり水が豊富な土地柄です。そう考えると、もっとお風呂文化が根付いてもいいのに…と思います。最大の難関はメジャーなお湯の供給方式がタンク式(特に戸建て住宅)だということ。それ故カナダ人の多くは沢山の湯を使ってもシャワーを浴びたり、お風呂に入ったりするのは他の同居人への迷惑、お湯の無駄遣いと考えられるようです。上記のような理由とその他の諸事情であまりお風呂をエンジョイする人口が少ないカナダ。しかし沢山の人の集まるトロントでは、お風呂好きのための施設がちゃんとあります。代表的なのはトロントの北部North Yorkにある本格的な韓国サウナが楽しめるSeoulZimzilbang。チムジルバンは韓国版のスーパー銭湯で、このSeoulZimzilbangでは色々な種類のお風呂やサウナが楽しめる評判です。郊外のMississaugaにはロシア式銭湯が何箇所もあり、ダウンタウンのChurch St.にはトロントLGBTの歴史的にも有名なゲイコミュニティのための大規模スーパー銭湯があります。暑い夏、皆さんも地元で隠れたお風呂やさんに行って汗を流してさっぱりしてはいかがでしょうか。(カナダ支店 那須絢子)

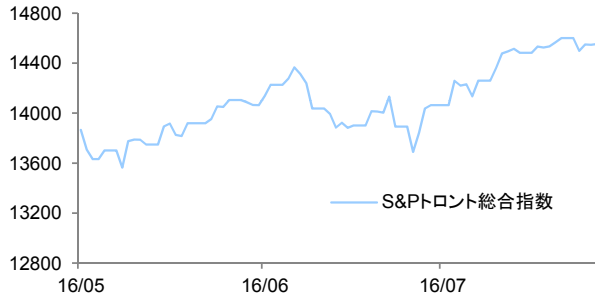
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	RBCカナダ製造業PMI	6月		51.8	52.1
7/8	失業率	6月	7.0%	6.8%	6.9%
7/8	雇用ネット変化	6月	5.0k	-0.7k	13.8k
7/11	住宅着工件数	6月	189.5k	218.3k	186.7k
7/13	カナダ銀行翌日物貸出金利	7月	0.50%	0.50%	0.50%
7/22	小売売上高(前月比)	5月	0.0%	0.2%	0.8%
7/22	消費者物価指数(前年比)	6月	1.4%	1.5%	1.5%
7/29	GDP(前月比)	5月	-0.5%	-0.6%	0.1%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1095 ~ 1150
 KRW/JPY 8.77 ~ 9.58
 JPY/KRW 10.40 ~ 11.40

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 山口 智裕

■ 先月の為替相場

7月のウォンは、韓国への資金流入が意識される中、幅広い通貨に対して堅調に推移。ドル/ウォンは続落した。

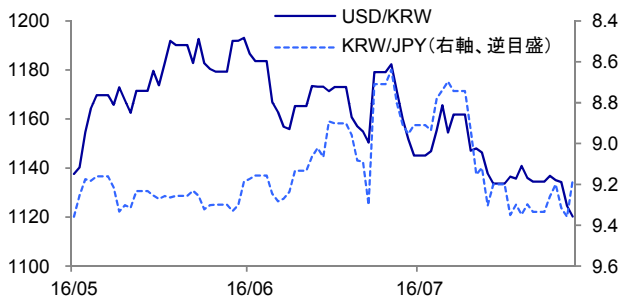
月初旬のドル/ウォンは上昇。先月のBREXIT後のリスクオフが巻き戻る中で、ドル/ウォンは前月末比+1.2の1153.0で取引を開始後、上値重く推移。しかし、4日、5日の海外市場で英不動産投資ファンドの取引を凍結したとの報道が相次いだことを受けてBREXITリスクが再度意識される中、6日にドル/ウォンは月高値となる前月末比+17.2の1169.0まで上昇した。その後は、雇用統計を控えて1150後半から1160近辺で推移した。

月中旬のドル/ウォンは下落。週末8日に発表された米6月雇用統計が市場予想を上回る良好な結果となり、米国株式市場ではS&P500指数が史上最高値を更新したことを受けて、週明け11日のドル/ウォンは1150台まで下落。14日、韓国銀行の金融通貨委員会では政策金利が1.25%に据え置かれた。市場予想通りではあったものの、決定が全会一致であったことや、李総裁が前月の利下げ時よりもハト派なスタンスでなかったことを受けて、ドル/ウォンは一段と下げ幅を拡大。本邦市場では11日の参議院選挙後に追加財政、金融政策実施期待が高まり、米国株式市場ではダウ平均やS&P500指数が連日で最高値を更新する中、15日にドル/ウォンは1130台まで下落した。ドル/円は、その後も「ヘリコプターマネー」に関する思惑を受けて一時107円台半ばまで上昇したが、ドル/ウォンは介入警戒感もあり1140近辺まで値を戻した。

月下旬のドル/ウォンは下落。21日、黒田総裁が「ヘリコプターマネー」について、必要性も可能性もないと発言したとの一部報道を受けて、ドル/円の上昇が一服。また、韓国への資金流入が継続し、韓国株式市場が年初来高値を更新する中、ドル/ウォンは上値重く推移した。27日のFOMCは、短期的な景気減速リスクが後退したとされたが、利上げを急ぐものではなかったことから、ドルが下落。29日の日銀会合では、ETF買入れ増額などの追加金融緩和が決定されたが、市場予想を下回る緩和であったことから、ドル/円が下落。ドル/ウォンも連れ安となり、ほぼ月の安値となる前月末比▲31.6の1120.2で引けた。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

8月のドル/ウォンはグローバルに金融緩和的なスタンスが継続していることから、引き続き上値の重い展開を予想する。

7月の韓国銀行金融通貨委員会では、全会一致で政策金利の据え置きが決定された。李総裁の発言も前月6月利下げ時よりもハト派的トーンが和らいでおり、目先は政策金利の据え置きが予想され、ウォン売り材料にはなりにくい。

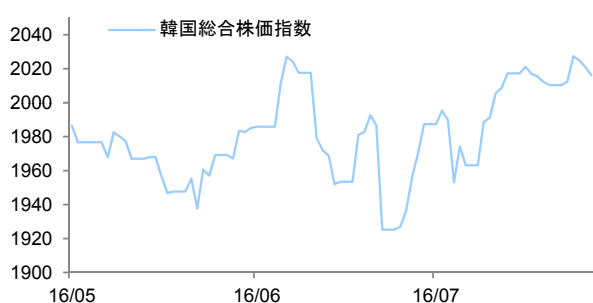
米国の次回FOMCは9月22日であり、7月のFOMC声明文では景気認識は上方修正されたものの、利上げを急ぐ内容ではなかったことから、8月初旬から中旬に早期利上げ観測が高まる展開はやや見込みにくい。

また、日銀金融政策決定会合では、次回9月20～21日の会合で量的・質的緩和の経済・物価動向や政策効果について総括的な検証を行うとしたことから、引き続き金融緩和が根強い。また、英中銀やECBの金融緩和期待も強く、アジア通貨のサポートになると考えられる。

ただし、5日の米7月雇用統計が堅調である場合や、26日のジャクソンホールでのイエレンFRB議長講演でドルが堅調となる可能性もあることには注意したい。また、ドル/ウォンは、夏休みなどで国内勢のウォン買いフローが減少する8月第2週近辺は上昇しやすい季節性があることは認識しておきたい。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』

韓国に住んで1年半、日本と似ていると感じるものが多いですが、お風呂事情は異なります。

1人暮らしの家にはシャワールームしかないですし、家族用の住居にも、浴槽はあっても洗面台とシャワーカーテンで仕切られているだけのユニットバスのようなものしかないです。トイレとも同室のケースがほとんどです。ので、お風呂にじっくり浸かるという文化はないです。

そんな韓国で家族、カップルなど幅広く親しまれているのが、チムジルバン(韓国式サウナ)です。健康ランドのイメージなのですが、様々な場所にあり、浴場、サウナ、マッサージや垢すりはもちろんのこと、恐らく一番有名であろう、龍山にあるDragon Hills Spaには、ヒーリングルーム、プール、フィッティングルーム、屋上ビアガーデンなどもあり、24時間年中無休で楽しむことができます。会社帰りに近くのチムジルバンに行ったら、同僚と会ったという話を聞くこともあります。

また、温泉街もあるようですが、私の家の近くに住んでいたら、日韓の温泉にかなり詳しい方曰く、日本のように趣きを感じるようなものではないらしいです。

私は一人でゆったり風呂に入りたいので、チムチルバンでも温泉でもなく、無理やりバスタブにお湯を貼って日本のお風呂を貫き通しています。

■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	消費者物価指数(前年比)	Jun	0.80%	0.80%	0.80%
7/1	輸出(前年比)	Jun	-8.20%	-2.70%	-6.00%
7/1	貿易収支	Jun	\$9100m	\$11643m	\$7082m
7/1	日経韓国PMI製造業	Jun	--	50.5	50.1
7/13	失業率(季調済)	Jun	3.70%	3.60%	3.70%
7/14	韓国銀行7日間貸しレート		1.25%	1.25%	1.25%
7/26	GDP(前年比)	2Q	3.00%	3.20%	2.80%
7/27	消費者信頼感	Jul	--	101.0	99.0
7/29	鉱工業生産(季調済/前月比)	Jun	-0.60%	-0.20%	2.50%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.30 ~ 32.50
TWD/JPY 3.05 ~ 3.30

台北資金室 辻野 順治

■ 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドル相場は、英国EU離脱(Brexit)決定の混乱も部分的に止まり、むしろリスクオンが強まる展開。台湾株式市場への外国人投資家資金流入が高水準で推移した一方、幾つかの強い米経済統計が確認されたことによる米ドル上昇もあり、結果的にはほぼ変わらない水準での推移が続いたが、月末にかけては、FOMCを受けた米ドル安により、前月末比、台湾ドル高となった。

7月のドル/台湾ドル相場は、32.20後半でオープン。前日の取引終了後に発表された台湾中銀の利下げ決定も、材料とはならず、台湾ドル高圧力が続く展開となり、一時、32.10台へ。4日は、米国休日かつアジア時間帯のイベントも無く、32.20付近で一進一退。5、6日は、イタリアの銀行への懸念や、英不動産ファンドの解約停止などにより、市場心理が悪化。一時、32.40台まで台湾ドル安となった。但し、7日には、前日に強い米経済統計が確認されたことで、市場心理悪化も収まり、32.30付近へ小幅台湾ドル高。8日は、台風により台湾市場は休場。

11日は、韓国ウォン高に連動し、32.20付近まで台湾ドル高が進行。14日には、韓国中銀の利下げ見送りによる韓国ウォン高に連動し、32.10付近へ。15日も、台湾株式市場への外国人投資家資金流入が続く中、韓国ウォン高に追従し、31.90台での取引となった。18日は、前週金曜日に発表された米6月小売売上高を受けた米ドル高により、台湾ドル安方向への動きとなったが、台湾株式市場への海外資金流入により、32.00付近までの動き。

20日は、前日発表の米6月住宅着工が市場予想を上回ったことで、米ドル高となり、32.05付近まで小幅台湾ドル安となった。21、22日は同水準で推移した後、25日は、米ドル高台湾ドル安の動きにより、32.15付近まで台湾ドル安となった。26日は、前日同水準で一進一退。27日は、前日発表された米アップルの決算発表を受けた台湾株式市場の上昇により、台湾ドル高圧力が強まるも、FOMC結果発表を控え、32.05程度までの動き。28日は、前日のFOMC結果を受けた米ドル安に連動し、32.00台割れとなり、31.95付近へ。29日も流れは変わらず、31.80台後半での取引となった。

■ 今月の見通し

8月のドル/台湾ドル相場は、一進一退を見込む。

台湾経済統計は、6月輸出、輸出受注、鉱工業生産が市場予想を上回るなど、明るい材料が出てきている。4～6月期GDPも、ようやく前年比プラスに転じ、秋以降の電子機器商戦に向けて順調な滑り出しを見せている印象。株式市場も、年初来高値を更新しているが、経済統計、企業売上が好感した結果であり、7月の外国人投資家の買い越し額は、1,600億台湾ドル超となり、過去5年を見る限り、月間では最大の買い越し額となった。

市場の混乱が無いという前提のもとでは、米ドル動向が台湾ドル相場の最大の材料。幾つかの強い米経済統計が確認されたことに加え、ユーロ、円の下落による相対的な要因もあり、米ドルインデックスは大きく上昇してきているが、従来から米ドル高の後、製造業関連などの米経済指標が落ち込むことで、米ドルが下落するという循環を繰り返しており、そろそろ警戒感が強まる状況だろう。7月FOMC声明を踏まえても、利上げが当面、見込まれない中では、一方的な米ドル高進行も見込みにくく、台湾ドル安は進みにくいと考え。米ドル高が一服する中で、台湾株式市場への海外資金流入が続く場合は、台湾ドル高進行に注意が必要となるが、直近6か月累計での株式市場への海外資金流入額は、3,000億台湾ドルを超えており、過去5年間でも最高水準となっている。米ドル高が一服し、株式市場への資金流入減速とのシナリオから、台湾ドル相場は一進一退の展開を見込む。

一方で、市場の混乱も依然、警戒が必要。英EU離脱を踏まえた7月分の統計が発表される中で、住宅関連(ローン承認件数、価格、建設業景況感など)の指標を中心に悪影響が確認されると、市場の雰囲気次第では、銀行への波及を過大視し、市場心理を大きく悪化させる材料となりうる。この場合は、逃避的に米ドル選好が強まることに加え、台湾株式市場からの外国人投資家資金流出も重なり、台湾ドル安となるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

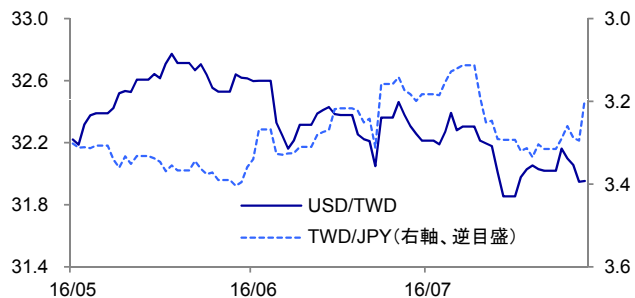
『当地のお風呂事情』

赴任時の家探しの経験を踏まえると、当地では浴槽無しが多かったように思います。また浴槽があっても、日本のように洗い場が併設されていないことも多く、この場合、先にお湯に浸かった後、お湯を抜きながら、浴槽についているシャワーで身体を洗うこととなります。ただ、年間通じて温暖であり、浴槽が無くても特に問題は無いと感じます。なお、シャワーから湯が出る速さは、家によって、まちまちなようです。湯沸かし器が設置されているほうが確実性が高いそうです。

なお、最上階は水回りのトラブルが多く、避けたほうが良いようです。私も以前、9階建のアパートの最上階に住んでいましたが、ある日、風呂場の排水溝から、少量の水が溢れて始め、その数日後には、リビングの床からも水が溢れてきました。どうやら屋上に水のタンクが設置されている場合、上層階へは、水圧を高める器具を通じて、水を供給しているようで、その器具が暴走していたようです。1週間ほどの修理の末、水漏れは収まったものの、しばらくすると、非常に小さい虫が大量発生し、殺虫剤や熱湯を試すも、全く虫が減らず、結局は引越することになってしまいました。このアパートは、築浅だったためか、浴槽にジェットバス機能も付いていましたが、たまに使うと、止まらなくなってしまうたり、トラブルが多かったです。多機能な設備があるほど、トラブルが生じるリスクも高まるので、シンプルな家に住むほうが慣れれてしまえば楽だと感じました。

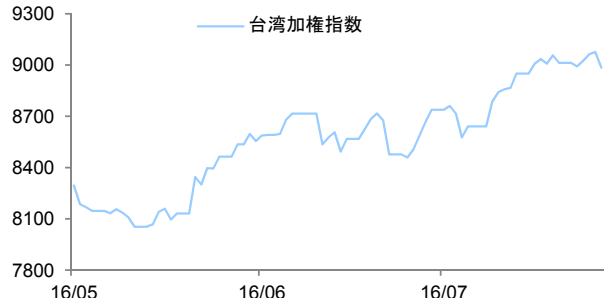
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	CPI(前年比)	6月	1.10%	0.90%	1.24%
7/8	輸出(前年比)	6月	-3.10%	-2.10%	-9.60%
7/8	輸入(前年比)	6月	-3.50%	-10.00%	-3.40%
7/20	輸出受注(前年比)	6月	-5.00%	-2.40%	-5.80%
7/22	失業率	6月	3.98%	3.96%	3.96%
7/22	鉱工業生産(前年比)	6月	0.50%	0.88%	1.89%
7/29	GDP(前年比)	2Q	0.70%	0.69%	-0.68%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7550 ~ 7.7750
HKD/JPY 12.90 ~ 13.53

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【7月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルは、香港への資金流入が増加したことから香港ドル高が進み、一時は3か月ぶりの水準となる7.7526に達した。英国のEU離脱(Brexit)を問う国民投票後、市場は米利上げペースの鈍化を織り込んでおり、これがアジア市場への資金流入につながっている。また人民元下落を見込む中国企業による人民元を香港ドルに替える動きも香港ドル高の要因として挙げられる。1年物のドル/香港ドルフォワードポイントについても、香港への資金流入と潤沢な流動性を反映して、年初来の低水準となった。このようにBrexitを問う国民投票後の香港ドル相場は総じて堅調であった。

【7月の香港ドル金利】

指標金利である3か月物HIBORは、香港ドルの潤沢な流動性を背景に0.55%前後で推移。依然潤沢とはいえ、香港金融管理局(HKMA)が発表する当座預金残高は2015年4月以来の低水準となる2,870億香港ドルまで減少した。同残高は香港の銀行間市場における流動性の尺度として捉えられている。その間、リスク許容度の回復に伴う株式の上昇から7.7520台まで香港ドル高が進んだ。他方、3か月物ドルLIBORは堅調な米経済指標を受けて上昇。同金利は2月以降香港ドルHIBORを上回って推移しているが、ドルLIBORの上昇から金利差は拡大した。その一方で香港ドル金利スワップレートも上昇したほか、長い年限の香港ドルベーススワップ(香港ドルHIBOR-ドルLIBOR)は香港ドル取りポジションが優勢で推移。背景としては香港企業による米ドル建て債券の発行が挙げられ、調達した米ドルを香港ドルに交換することに起因する。

【7月の香港株式市場】

ハンセン指数は、リスク許容度の回復とBrexitを問う国民投票後に各国が緩和的な姿勢を見せたことを背景に、年初来となる22,000超えの上昇。米利上げペースの鈍化観測から株式市場に資金が流入した。相場を牽引したのは不動産セクターで、米政策金利が長期間にわたり低位で推移するとの期待から不動産価格が反発したことによる。加えて、米中の株式相場が好調であったことも支援材料となった。

■ 今月の見通し

【8月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルは7.755から7.775のレンジ推移を予想する。米利上げペースは鈍化すると見られるが、堅調な米経済指標とリスクテイク意欲の高まりから今年の利上げについてはまだ可能性が残っており、米利上げ期待が再燃すればドル/香港ドルは押し上げられることとなる。加えて、香港に上場する中国企業の配当金支払いの一巡や人民元下落観測の後退といった、これまで香港ドルを支えてきた要因の剥落が見られる。その一方で、好調な株式相場や不動産相場は今後も資金流入をもたらす、香港ドルを下支えすることとなる。将来的に香港ドルは米ドルに対するペッグ制を見直し人民元との連動を図る可能性があるものの、人民元市場の自由化が不完全なものに留まっている限り、現在のペッグ制が変わることは無いだろう。

【8月の香港ドル金利市場】

香港ドルの流動性は当座預金残高に見られるように減少しているとはいえ、全体として見れば引き続き潤沢であり、米利上げペースが現在のように緩慢である限り香港ドルの金利上昇リスクは限定的であると見込む。しかしながら、ペッグ制の下限である7.75に達するまで香港ドル高が進むことはないとの見方から、香港ドルの流動性は徐々に減少すると考えている。すなわちHKMAが市場に介入して追加の流動性を供給する可能性は見込みにくく、長期的には香港ドル金利の上昇につながる可能性がある。

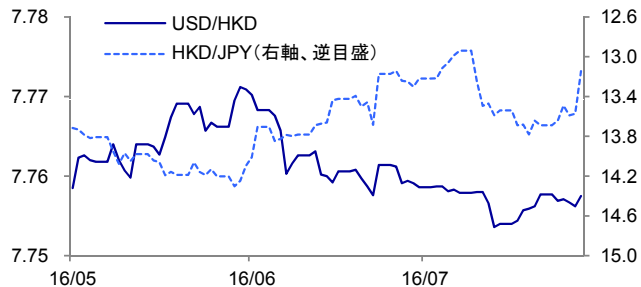
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』

香港は温泉施設の無い街であり、家でシャワーを浴びるのが普通である。勤務時間が長いこともあって、狭いバスルームでさっとシャワーを浴びて済ませるのが典型的なケースである。温泉の代わりにサウナに行って汗をかく人もいる。サウナの習慣は昔に比べ一般的になっており、フィットネスルームでサウナを備えたところもある。サウナから出た後はマッサージを受けたりそのまま一泊することもできる。

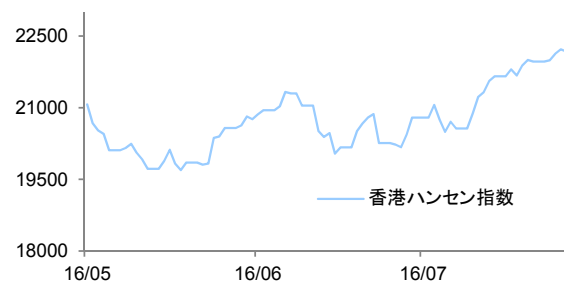
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/6	日経香港PMI	6月	--	45.4	47.2
7/7	外貨準備高	6月	--	\$360.6b	\$360.3b
7/19	失業率(季調済)	6月	3.5%	3.40%	3.40%
7/19	総合利率	6月	--	0.26%	0.26%
7/21	CPIコボジット(前年比)	6月	2.50%	2.40%	2.60%
7/26	輸出(前年比)	6月	-1.6%	-1.00%	-0.10%
7/26	輸入(前年比)	6月	-5.00%	-0.90%	-4.30%
7/26	貿易収支	6月	-34.7b	-45.6b	-26.2b
7/29	マネーサプライM1(HKD/前年比)	6月	--	3.2%	3.80%
7/29	マネーサプライM2(HKD/前年比)	6月	--	2.2%	1.40%

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.5800	~	6.7800
	CNY/JPY	14.31	~	15.96
	100JPY/CNY	6.2700	~	6.9140

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 上城戸 千尋

■ 先月の為替相場

【為替相場】

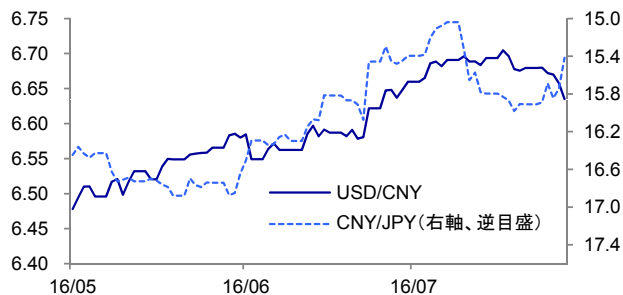
7月の人民元相場は、人民元安基調が続き、実勢相場は一時6.70を超える水準まで人民元安が進行するも、その後はやや持ち直して推移した。月初は、6月30日に「中国人民銀行は年内に人民元を6.8元に下落させることを容認」との報道が流れ、後に否定されるも当局が人民元安を許容しているとの憶測が拡がり、ドル/人民元は6.70手前まで人民元安が進んだ。しかし月半ばは、Brexitに対する先行き不透明感が徐々に薄れ、英ポンドやユーロが再び買い戻されドル安が進んだことで人民銀行(PBoC)仲値は連日元高水準に設定。加えて、当局の為替介入と思われるドル売り人民元買いのフローが見られたことから実勢相場はやや人民元高で推移した。15日に発表された中国4～6月期GDPが市場予想をやや上回るも相場の反応は限定的で人民元高地合いが続いたが、その後発表された米経済指標が良好な結果であったことを材料にドルが上昇し、PBoC仲値が約5年半振りの人民元安水準で設定され、実勢相場は一時6.70を突破。但し、6.70台でのドル売り圧力が強いことや、当局の介入と思われるドル売り人民元買いのフローが再び見られたことで、実勢相場は人民元高に進んだ。その後は6.67付近で推移している。月後半に実勢相場が人民元安に進む場面で、PBoC仲値が連日元高水準に設定されたほか、為替介入と思われるフローも入る等、当局が“過度な”人民元安については警戒している様子が伺える。

【金利相場】

比較的安定して推移するも月末にかけてやや流動性がタイト化し、マネー金利は小幅上昇した。月初の公開市場操作は満期到来分とネットすると連日資金吸収となるも、6月に半期末の資金需要に対応すべく大規模な資金供給が実施されていたことや、中資系銀行が資金供給を継続していたことから、流動性は安定した状態が継続。また、小幅上昇していたマネー金利も全般的に低下した。月半ばには公開市場操作を通じてネットで資金供給が続き、中期貸出ファシリティー(MLF)も満期到来分を上回る金額で実施された。しかし、月後半では税金払込みに伴う資金需要やMLFの満期到来等から流動性がややタイト化し、マネー金利も短期物を中心に小幅上昇する場面も見られた。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

【為替相場】

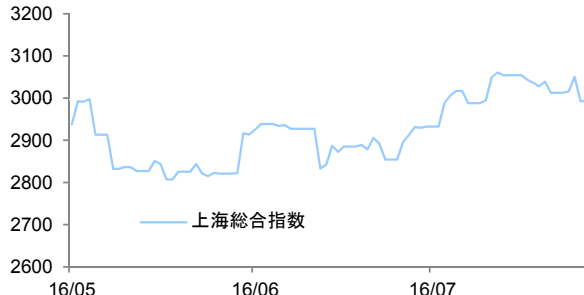
ドル/人民元は7月と同水準の6.6台後半での推移を予想。6月の英国民投票以降、人民元は元安方向に推移し直近の安値を更新。PBoC仲値も元安に設定され、実勢相場は一時、約5年半ぶりの安値となる6.70を超える水準をつけた。人民元安が進行する局面では、当局が介入を行っているとの噂される一方、輸出振興のための元安容認姿勢を取っているとの見方もあり、足許では相場が一方向的に動くことは想定しづらい状況。引き続き、資本流出を抑えるための外貨買い規制は徹底されており、9月4～5日に中国・杭州で行われるG20首脳会議を前に、当局は相場の安定に努めるものと考え。

【金利市場】

納税等の資金需要の高まりから7月後半には流動性がややタイト化し、マネー金利が小幅上昇する場面も見られたが、PBoCは引き続き公開市場操作やMLFを通じて資金供給を行い、相場の安定を図るものと思われる。月末にかけて上昇したマネー金利が元の水準まで戻るかは注意したい。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』

お風呂でまずポイントとなるシャワーの水圧ですが、弱いところが多いようで、私が住んでいるマンションのシャワーも優しい勢いしかありません。新しいマンションでも同様のようなので、髪が長い方は少し不便に感じるかもしれません。お風呂はシャワーブースが主流で、マンションによっては浴槽がついていることもあります。あくまで洗い場は別になっています。次に水の綺麗さですが、今の上海はとても綺麗です。私が10年ほど前に上海に旅行に来た際は、綺麗な中堅ホテル(だったはず)でもシャワーから薄茶色の水が出てきて衝撃を受けた記憶がありますが、それは昔の話。最近の上海では、水道管工事での断水直後でまれに茶色い水出てくるかもしれない程度です。浴槽にお湯をためて入ることができるので、湯船につかって日頃の疲れを取ることができます。あとは街中に何件か日本式のスーパー銭湯も有り、日本人だけでなく地元の人も利用しています。銭湯では食事処やマッサージなども併設されており、娯楽施設となっているようですが、私はまだ行ったことがありません。そのシャワーの水圧が強いようであれば行ってみたいと思います。

■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	50.0	50.0	50.1
7/10	CPI(前年比)	6月	1.8%	1.9%	2.0%
7/10	PPI(前年比)	6月	-2.5%	-2.6%	-2.8%
7/13	貿易収支(RMB建)	6月	323.00B	311.20B	324.77B
7/13	輸出(RMB建)(前年比)	6月	0.3%	1.3%	1.2%
7/13	輸入(RMB建)(前年比)	6月	-1.2%	-2.3%	5.1%
7/15	GDP(前年比)	2Q	6.6%	6.7%	6.7%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3300 ~ 1.3800
SGD/JPY 74.50 ~ 78.90

アジア・オセアニア資金部 吉田 聡

■ 先月の為替相場

7月のシンガポールドル(SGD)相場は下落。6月24日の英国EU離脱(Brexit)派勝利の報に1.37近辺まで下落したSGDは、その後6月末にかけて落ち着きを取戻し、7月は1.34台半ばでスタート。この月は月末週にFOMCや日銀金融政策決定会合など日米重要金融イベントを控え、方向感に欠ける展開が継続した。月後半に米経済指標で強めの結果が発表されるに連れ、ドル選好地合いが強まると、SGDは徐々に弱含み、月初からレベルを下げて取引を終えている。

月初は、Brexitを受けた主要先進国中銀の金融緩和姿勢を背景に、SGDはやや強含む動きだったが、5日の海外時間に「英不動産大手2社が取引停止」というヘッドラインが流れると、リスクオフムードの強まりからSGDは1.35台前半まで下落。その後米雇用統計を控えて落ち着きを取り戻すにつれ、SGDは1.34台まで買い戻されたが、8日、注目された米6月雇用統計にて非農業部門雇用者数が前月比+28.7万人と、予想の同+18万人を大きく上回ると、米金利の上昇を受けたドル買いに結局SGDは1.35台まで押し戻された。

中旬は、堅調なアジア株式市場と米金利上昇を背景としたドル買いに挟まれ、SGDは小動き。14日に発表されたシンガポール4～6月期GDPは市場予想通りとなったが、同時に1～3月期が上方修正されたことで、SGDはやや強含み、この月の高値となる1.34近辺をつけた。

15日からはやや潮目が変わり、米国で発表された6月住宅着工件数や6月中古住宅販売件数などが予想を上回り、米住宅市場の底堅さが確認されると、好調な米株とともに米金利も上昇、あわせて日銀の追加緩和観測が高まると、ドル/円が上昇する動きに、ドル買いがSGDにも波及、SGDは下旬にかけて軟調な地合いとなった。なお、21日にはシンガポール当局からマレーシア政府系投資会社(1MDB)に関する調査関連で2.4億SGDの資産を差し押さえた旨発表があり、SGDの軟調地合いに拍車をかけている。

結局SGDは1.36近辺で最終週を迎え、週初は日米金融政策決定会合を控え揉み合い推移が続いていたが、27日の米FOMCにて政策金利の据え置きとハト派な声明文が発表されると、ドル売り優勢の中でSGDは1.35近辺まで値を上げた。その後月末に日銀が追加緩和を発表するも緩和策が事前予想を下回ったことで円買い・ドル売り地合いとなり、結局SGDは1.35近辺で7月の取引を終えている。

■ 今月の見通し

8月のシンガポールドル(SGD)は、レンジ相場を予想。足許では、Brexitによる世界経済情勢への下押し圧力懸念(リスクオフ、アジア通貨売り)と、米利上げ観測の後退(米ドル売り)に挟まれ、アジア通貨は明確なトレンドが出にくい状況だが、加えて8月は夏季休暇で主要通貨を中心に動意が乏しくなる上、シンガポールは9日が独立記念日で休場となることもあり、アジア通貨の中でも特にSGDは夏枯れ相場で小動きになる可能性が高いと考えている。

まずは外部要因に目を向けると、英国のEU離脱派勝利から1か月が経過する中、ドイツで発表された7月ZEW景況感指数は3年8か月ぶりの低水準を記録するなど徐々にユーロ圏経済への悪影響が見え始めている。ユーロ圏への輸出が輸出全体の5%強を占めるシンガポールにとって、ユーロ経済の減速は明らかに悪材料で、SGDにとっては今後の下押し圧力となるだろう。

一方、米利上げ動向については、7月下旬に米住宅市場に関する経済指標にて良好な内容が確認されたことで、一部では年内の米利上げ観測が再び高まっているが、7月8日に強い米雇用統計結果が示されたにも拘わらず、ドル/円が100円割れを試した事実を考えれば、市場はFRBの正常化プロセスに関しては半信半疑と言えそう。加えて複数のFRB高官からBrexitがもたらす経済への影響を見極めたいとの発言が相次いでいることを踏まえれば、今後ドル買いが強まる地合いは想定しにくい。

他方、シンガポールの経済情勢は冴えない動きが続く。7月18日に発表された6月地場輸出(除く石油)は前年比▲2.3%と、主力である電子機器が低水準に留まる中、減速基調から抜け出せておらず、15日に発表された5月小売売上高も前年比+3.0%と、前月(同+3.8%)から減速し国内消費に加速の兆しはない。一方、25日に発表された6月消費者物価指数(CPI)ではコアが前年比+1.1%と7か月連続で加速しており、インフレ圧力は徐々にではあるが着実に高まっていることから、金融管理局(MAS)が前回4月に続き次回10月の定例会合までに更なる金融緩和措置に踏み切る可能性は低い。依然として国内要因でSGDに明確な方向感が出なそう。

8月は日米金融政策イベントも予定されておらず、外部要因、国内要因ともにトレンドを見出し難い中、SGD相場はここ数か月の中心となっている1.35を挟んだレンジ相場を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

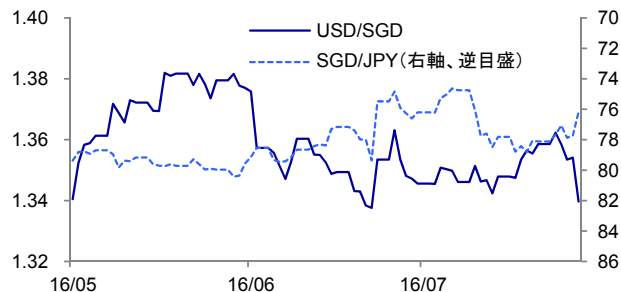
『当地のお風呂事情』

シンガポールは基本的には常夏であるがゆえに、現地の方は風呂に入るとい習慣はありません。なので、住居にもバスタブがないという状況もままあります。一方で、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、シンガポールのエアコンの強さは抜群です。オフィス・ショッピングモール・タクシーなど全てにおいて18度設定のクーラーにさらされます。なので私はオフィスでフリースを着用しておりますが、冷え切った体にはやはり風呂が必要です。幸いにも私の住居にはバスタブがありますが、そのバスタブも日本の仕様とは大分異なります。まずは、給湯システムがないことから、貯水槽にある水を温めなければいけません。温まるまで10分。それから風呂を貯め始めさらに10分経過。そして、体を洗うためのシャワーを温める為にもう10分となかなか風呂に入るのにも時間がかかります。また、そもそも風呂に毎日入るとい設計ではないからかもしれませんが、風呂を多用すると信じられないくらいカビが生えます。基本的にシンガポール生活で不便を感じることは殆どありませんが、まさにこの風呂事情だけはいただけません。ニーズがないのは分かっていますが、日本のようなかいゆいところまで手の届く、心地よい風呂が輸入されることを願う毎日です。

(宮地)

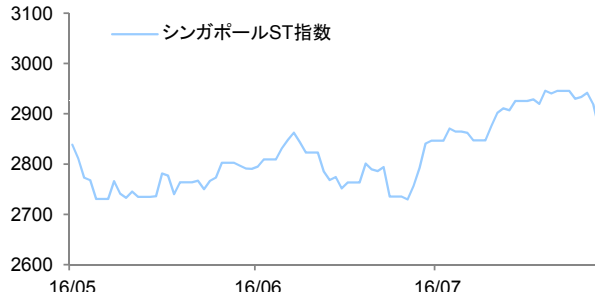
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	購買部景気指数	6月	49.8	49.6	49.8
7/4	電子産業指数	6月	-	49.0	49.1
7/14	GDP (前年比)	2Q	2.2%	2.2%	2.1%
7/15	小売売上高 (前年比)	5月	1.9%	3.0%	3.2%
7/18	非石油輸出 (前年比)	6月	-3.0%	-2.3%	11.6%
7/25	CPI (前年比)	6月	-1.1%	-0.7%	-1.6%
7/26	鉱工業生産 (前年比)	6月	0.5%	-0.3%	0.8%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 34.50 ~ 35.50
THB/JPY 2.78 ~ 3.00

バンコック資金室 井上 由貴

■ 先月の為替相場

●7月のドル/バーツは上値重く推移した。上旬のドル/バーツは底堅く推移。月初1日、35.10台前半で取引を開始。タイ休日で薄商い、英国EU離脱(Brexit)決定後のリスクオフムードが一旦緩む展開にじりじりとバーツ高の展開。6月消費者物価指数(CPI)は前年比+0.38%となり、市場予想を下回ったものの3か月連続の前年比プラスとなった。4日には節目の35割れを試すも、週半ばにかけては英不動産ファンドの「凍結(解約手続きの中止)」に端を発したリスクオフムードの高まりからドル買いが優勢となりドル/バーツは35.20台半ばまで上昇。しかし債券市場への資金流入がバーツ高圧力となる形でドルバーツの上値は限定的。8日の海外時間に発表された米6月雇用統計が予想比良好な内容となると、ドル買い優勢となり35.30手前まで上昇した。中旬、リスクオンムードの高まりにドル/バーツは下落。日銀の追加緩和期待や一部でのヘリコプターマネー導入との観測を背景にリスクオンムード。タイ株式市場は高値を更新し、株式市場への資金流入を背景にバーツ高が優勢。14日にはウィラタイ・タイ中銀総裁が「Brexit決定以降資金流入が拡大しているが、懸念はしていない」「政府は景気刺激策をとるべき」と発言。マーケット全体のリスクセンチメント改善が続き、35.00を割り込むと34.90台前半までバーツ高が進んだ。下旬、ドル/バーツは35.00を挟んでレンジ推移。18日、19日の連休明けのタイ市場では株式の高値更新が継続する展開となると、35.00バーツを挟んだレンジ推移となった。その後21日には黒田日銀総裁による「ヘリコプターマネーの必要性も可能性も無い」との発言が伝わり、ドル/円が急落、ドル売り優勢の展開にドル/バーツも上値重く推移。22日にかけて5月上旬以来となる35.80台後半まで下落した。しかし下値では中銀の介入期待も根強いことや、株式相場の高値更新が一服したこともあり、ドルバーツは35.00近辺まで小幅に反発。FOMC、日銀会合などの重要イベントを控えて35.00を挟んで神経質な値動きとなった。27日に公表された6月貿易統計では輸出が前年比▲0.1%のマイナス。市場予想ほど悪化はしなかったものの、3か月連続での前年比マイナスとなった。その後、FOMC声明文が早期の利上げ観測を高める内容ではなかったことや、日銀の追加緩和が市場の期待を裏切る小規模にとどまったことを背景にドル売りが優勢となるとドルバーツは35.80近辺まで下値を伸ばした。

■ 今月の見通し

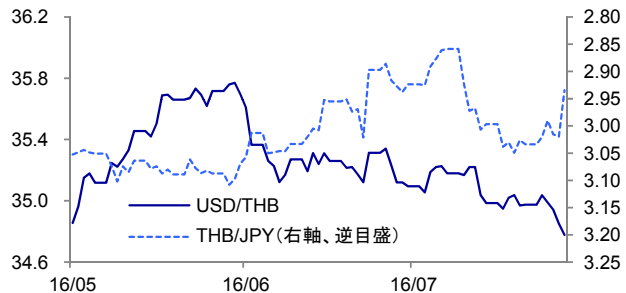
●8月のドル/バーツはじりじりと下落か。引き続きドル/バーツは狭いレンジでの推移が継続している。FRBの利上げ観測が盛り上がり欠ける状況下、ドル売り優勢の展開になりやすい。また、各国で断続的に発生しているテロ関連のヘッドラインにも市場の反応は極めて薄くなっており、有事のドル買いが盛り上がる雰囲気は感じられない。ドル/バーツに関しては、重要な節目として意識されていた35.00を割り込んでからは、若干レンジを切り下げ、35.00を挟んだレンジ推移が継続している。周辺国中銀が金融緩和合戦を繰り広げる中、タイ中銀(BOT)は静観を保っている。7月6日に公表されたMPC議事録(6月22日開催分)では、英国EU離脱(Brexit)や中国懸念を含むリスクを踏まえ、政策変更の余地(利下げ余地)を残したことが明らかになった。その後、実際に英国国民投票でBrexitが選択され、マーケット全体での混乱はあったものの、その後は鳴りを潜めている状況。依然として外部のリスク要因は残るが、タイ国内景気に関して、BOTは比較的強気の見方が感じられ、他の中銀のようにすぐにサブライズ利下げに踏み切るとは考えづらい。CPIについては3か月連続で前年比プラス圏を維持しており、BOTは今年後半にターゲットレンジである+1.00〜4.00%に到達するとの見方を変えていない。8月15日に発表される4〜6月期GDPに関しても、政府支出と観光業の好調を背景に1〜3月期から加速するとの見方を維持している。また個人的には、6月22日開催分のMPC議事録でバーツ高への懸念を示す文言が見当たらなかったことに注目している。会合が行われた6月下旬は35.10台で安定していたことを考えれば、BOTとしても許容できる水準であったと捉えることもできるが、35.00を割り込んだ後も、当局からバーツ高を懸念するコメントは特別聞かれない。ウィラタイBOT総裁やアビサック財務相からは、バーツ高の要因となるタイへの資金流入に関して許容する主旨の発言が出ており、バーツの買い安心感は増している。週次で公表されているBOTの外貨準備を見ても、年初来右肩上がりで積み上がってきた残高は7月に入り頭打ちとなっている。バーツ高進行のスピードが速ければBOTによる強断なドル買い介入も想定されるが、足許では緩やかなバーツ高進行にとどまっていることを考えれば、タイへの資金流入フローとBOTの我慢比べか。年初来安値である34.70近辺でのBOTの動きには再び要注意である。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』
タイ人スタッフに話を聞いてみたところ、通常タイの家にはバスタブがありません。シャワーのみです。掃除するのが大変だから、バスタブは要らないとの働くママの声も。暑い国ではありますが、温かいシャワーを好む人も多いようです。その証拠に、家電量販店に行くと、バスルームに取り付けるタイプの温水器が大量に売られています。日本では見えない光景ですね。さて話は変わりますが、タイのニュースを見ていると、クスリと笑えるほっこりニュースに目を奪われます。最近個人的に一番のお気に入り、くまモンの偽物マスコットがイベントに登場し、怒ったファンが通報、主催者が謝罪に追い込まれた。』というもの。にせものくまモンは手足が長く、おなか周りもスリムになったスレンダーだったとか。写真を見ると足はスラッとしていて美脚ですね。こういうの大好きです。所変わ、タイのシラチャで日本人女性がシャワーで感電失神」というニュースも発見。ビリッと来たくらいかと、詳しく記事を読むと、なにやらバスルームの電気温水器が原因のよう。シャワーホースから感電し失神。幸い命に別状はなかったものの、彼女のコメントでは、「自分はすでに死んでいるという意識の中で、家族のことや、電気イスに座らされて処刑される映画のシーンなどを思い出しているうちに、周りが真っ暗となり、意識を失った」そう。こちらもオーナーは直ちに謝罪。怖い。怖すぎます。なんだか世界びっくりニュースみたいになりましたが、、、、以上、バンコックから井上がお送りいたしました。

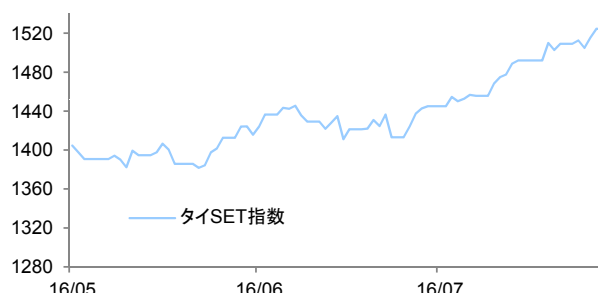
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	CPI (前年比)	6月	0.50%	0.38%	0.46%
7/7	消費者信頼感	6月	-	71.6	72.6
7/27	輸出(通関ベース、前年比)	6月	-2.60%	-0.10%	-4.40%
7/27	輸入(通関ベース、前年比)	6月	-8.90%	-10.10%	-4.40%
7/27	通関貿易収支(USD)	6月	\$1499M	\$1965M	\$1540M
7/28	製造業生産指数	6月	2.0%	0.8%	2.7%
7/28	設備稼働率指数	6月	-	66.3	67.5
7/29	経常収支	6月	\$2265M	\$2978M	\$2234M

(資料) ブルームバーク

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.00 ~ 4.20
MYR/JPY 24.00 ~ 26.20

アジア・オセアニア資金部 宮地 崇

■ 先月の為替相場

先月のマレーシアリングは、4.01台後半でオープン。英国の国民投票でEU離脱派の勝利を背景に売られていたリングであったが、市場が落ち着きを取り戻したことで、巻き戻しの動きが優勢となり、月初は3.98台前半まで値を上げた。

その後、堅調な原油価格と主要中銀の金融緩和観測の台頭に伴う資金流入期待からリングは底堅く推移。しかし、5日に再び市場でリスクオフモードが優勢となったことに加え、ハリヤ前月の利益確定リング売りも手伝い、4.02台後半まで下落。6-7日はハリヤの為にオンショア市場は休場。連休明けの8日には、イタリアの金融機関に対する懸念や南欧の財政問題が嫌気され4.04台半ばまで続落した。

11日には、前週末に発表された米6月雇用統計が強い結果であったものの、米金利の上昇には至らず、ドル売りの反応となったことから、週明けのリング相場もリング買いで取引開始。その後もドル売りの流れにリングは3.96台半ばまで上昇。13日にはマレーシア中銀が、金融政策決定会合で予想外の利下げを約7年半ぶりに実施。政策金利を25ベースポイント引き下げ3.25%から3.00%とした。市場では直後こそリング売りとなったものの、外国勢からの資金流入が継続したことで、14日にはリングは一時3.93台前半まで続伸した。

月半ばに入り18日には、前週末にトルコでのクーデターが発生した際の有事のドル買いの動きが波及し、3.97台後半でギャップオープン。また、同日にマレーシアリングのフィクシングレート（計算ロジック）が変更されたものの、相場への影響は特段見られなかった。その後、原油価格がやや下落する動きや米金利の上昇にリングは4.04台まで下落。20日にマレーシア6月の消費者物価指数が発表され市場予想を下回ったものの、相場への影響は限定的。21日には、シンガポール当局が1MDBの捜査を受けて資産の差し押さえを執行したことから、リングは続落4.07台前半を付けた。

月末週には、原油価格の軟調推移も手伝いリングは、25日に先月の安値となる4.09台半ばまで弱含んだ。その後、FOMC後のドル売りの流れにやや値を戻し4.06台半ばでクローズした。

■ 今月の見通し

足許のマレーシアの経済状況は決して良好とはいえない。まず、直近5月の貿易収支では黒字額が縮小、2015年7月以来の水準まで低下している。加えて、鉱工業生産も低水準で推移しており、従来から予想されている同国経済の悪化がじわりと進行している。

また、英国のEU離脱がマレーシアに及ぼす影響は、他のアジアの国々に比べるとやや高いものと考えられる。マレーシアは対EU向けの輸出はアジア各国の中でも高水準、かつマレーシア経済は輸出依存度が高く、貿易面からの悪影響が懸念される。もちろん、早期に悪影響が顕在化する可能性は低いものの、輸出の鈍化が今後じわりと景況感に悪影響を及ぼす展開も想定され、総じてBrexitに係る問題はマレーシアリングにはネガティブに反応する公算が大きい。

一方これに対し、マレーシア中銀は先月中旬に約7年半ぶりに利下げを実施。中銀は声明文のなかで現状の国内経済の認識は基本的に据え置いたが英国のEU離脱に伴う先行きの下振れリスクを指摘。主要輸出先の需要鈍化、世界経済の不確実性により景気悪化懸念にも言及した。

今般のマレーシア中銀の利下げは予防的な措置であり、それ故、通常、中銀の利下げは、通貨安を喚起するが、先月の利下げ後のように、景況感を下支えするとの期待感からむしろリングが選好された。他のアジア諸国のように本格的な利下げ局面に入ったと考えるには時期尚早であるが、直近マレーシア消費者物価指数も下落基調が顕著であり、再びマレーシア中銀が利下げに踏み切る可能性も否定できない。

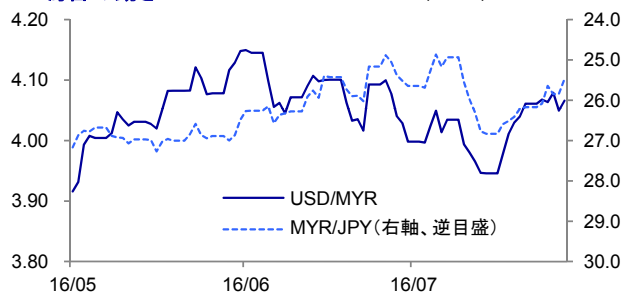
斯かる経済状況の鈍化に加え、再び原油が上値の重い値動きとなっている状況を踏まえると、今月のマレーシアリングは上値の重い展開を予想する。但し、マレーシア中銀の利下げ観測は、通貨安よりも景況感悪化の歯止め役としてポジティブに捉えられることが予想され、下値も限定的か。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』マレーシアのお風呂事情ですが、一般的に風呂に浸かるという習慣はないようで基本的にはシャワーのみです。勿論、中級以上のホテルや最近のコンドミニアムにはバスタブが付いているケースが多いですが、ほぼ確実に風呂とトイレに仕切りはありません。ただ、コンドミニアムだと大概の場合、マスターベッドルーム用とゲスト用でシャワー、トイレが2つ、家が広ければ3つ、4つ設置されているケースが大半の為、トイレで争うということはほぼないと思われます。またマレーシア人は場所柄1年中暑いということもありどうもシャワーは水というのが一般的なようですが、エアコンも広く普及している現在では、そこで水シャワーを浴びると一発で風邪を引かねないのとお湯が出るようになってます。ただ私が知る限り、電気でお湯を沸かす方式の為、水圧が強い場合には熱が伝わりきらず結局最初から最後まで温いままでということも日常茶飯事です(逆に水圧が弱いと熱いお湯が出る確率はぐっと高まりますが、要は水の出が悪いのでこれはこれでストレスを感じます)。この電気沸かし方式ですが、当初赴任した際はずっと付けっ放しにしていたところ、電気代が大変なことになりました。しかも付けっ放しにしていると漏電リスクが高まり感電死する恐れが出る(事実、過去に日本人が感電死した事例もあります)ということで、今現在は必要な時だけスイッチを入れるということ徹底しています。ということで、お風呂という話になると湯量少なく熱いお湯だと溜まるまでに温くなる、湯量多めで温いお湯だと結局温いまま、なので風呂に浸かろうという思いに全くならないのが実情で、これを脱却するにはガス給湯器を仕入れるしか他に道はなさそうです。尚、日本人が訪れる某ゴルフ場には湯船が存在する他、イポーだとかコタキナバルの方に温泉があるそうなので、マレーシア国内で湯に浸かりたいければ、そこに行けということですね。(マレーシアみずほ 山田)

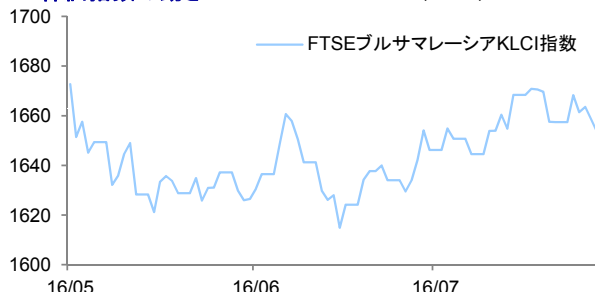
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	輸出 (前年比)	5月	2.0%	-0.9%	1.6%
7/1	輸入 (前年比)	5月	-2.9%	3.1%	-2.3%
7/1	貿易収支 (MYR)	5月	8.26b	3.26b	9.06b
7/12	鉱工業生産 (前年比)	5月	2.5%	2.7%	3.0%
7/13	BNM翌日物政策金利	5月	3.25%	3.00%	3.25%
7/20	消費者物価指数	6月	1.8%	1.6%	2.0%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13000 ~ 13500
 IDR/JPY 0.76 ~ 0.82
 JPY/IDR 123.81 ~ 131.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシアみずほ銀行 河合 良介
 アジア・オセアニア業務部 小泉 聡

■ 先月の為替相場

7月のドル/ルピアは小動きの展開に。

今年のレバラン休暇(断食明け大祭)により、7月の事実上のスタートは11日となったが(マーケットクローズは5～8日)、ドル/ルピアは13050～13150付近での狭いレンジ相場となった。

前月下旬のBrexit決定後には、政府が発表したタックスアムネ스티(租税恩赦)により、インドネシアへの証券投資流入が加速したが、レバラン明けの市場では一服感が出た格好だ。ただ、証券投資流入は堅調で、7月下旬のジャカルタ株価指数は1年1か月の高値を付け、10年国債利回りも7%付近での推移となり、約1年半ぶりの低水準(=高値)となっている。

尚、6月末外貨準備高が前月比大幅に増加したが、ルピア相場へに与える影響は限定的となった。また、インドネシア中銀(BI)の定例会合では利下げ予想もある中での金利は据え置かれたが、次回会合(8月19日)より政策金利を7日物リバースレポレートに変更することに鑑みた上での据え置き決定だったようだ。

■ 今月の見通し

今月もドル/ルピアは13000台前半での動きとなるか。

Brexitが終了し、タックスアムネ스티(租税恩赦)の追い風も受け、ルピアは安定推移が続いているが、ドル/ルピアは節目の13000を割り込めないでいる。一方で、今後相場のメインテーマとなるであろう米金融政策の動向については、利上げ観測後退論が強く、ドル堅調とも言いづらい状況だ。

そのため、ドル/ルピアを方向付ける材料に欠ける展開が続き、13000台前半での揉み合いが長期化する可能性もあるだろう。

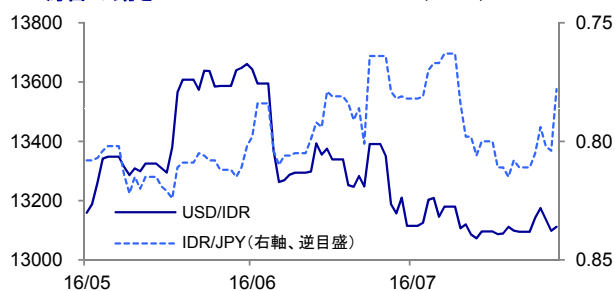
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』
 インドネシアのホテルでは大抵浴槽が設置されていますが、スタッフに聞いてみると、湯船に浸かる文化はないようです。一方で、1日2回水浴びを行う人も多いようです。尚、自身が住んでいたアパートにはバスタブは設置されていました(ただ、水の濁りが激しい時も多々あるため、毎日入っていたわけではありません)。

東南アジア生活も長くなってきましたが、日本に入っていたような柔らかな水質でのお風呂に恋しくなる今日この頃です。

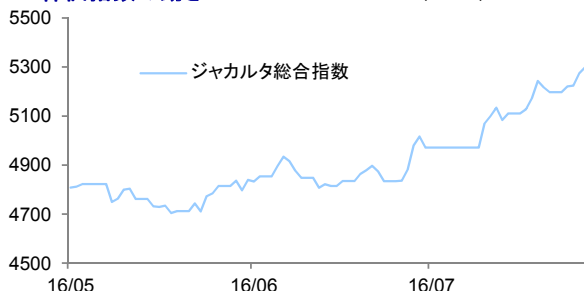
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	CPI(前年同月比)	6月	3.40%	3.45%	3.33%
7/14	外貨準備高(USD B)	6月	-	109.79	103.60
7/15	貿易収支(USD M)	6月	212	900	376
7/21	BIターゲットレート	7月	6.25%	6.50%	6.50%

(資料) ブルームバーク

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 46.00 ~ 47.60
PHP/JPY 2.06 ~ 2.20

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

7月のドル/ペソ為替相場は方向感出ず。1ドル=47ペソを挟んでの取引。

オンショアのドル/ペソ相場は、1ドル=47.00ペソ丁度で取引開始。BREXITという悪材料を市場が消化するスピードは思いのほか早く、6月末に発足したドゥテルテ新政権への期待もあり、月初は一時的にペソ高(1ドル=46.70ペソ台)が進む。

しかしながら4日(月)が米国市場が休場、6日(水)がラマダン明けでフィリピン市場が休場になり、8日(金)には米6月雇用統計の発表があったことから積極的な取引は手控えられると、英国不動産ファンドの取引停止、イタリア・英国系銀行の株安が嫌気され、市場心理の悪化に連れて8日には1ドル=47.10ペソレベルへとドルが買い戻された。

米6月雇用統計を受けての11日のオンショア市場は、ドル買い地合で取引開始。12日には、一時1ドル=47.50ペソまでドルが買い進まれる。米雇用統計の結果を受け、ドル高リスクを懸念した実需筋(輸入企業)が、決済が集中する月末を前に早目のヘッジに動いていた模様。その後、グローバルな株価上昇、米金利が上昇するリスクオンムードの流れにドルペソ相場は次第にペソ高圧力が強まる。フィリピン株式市場は15日には、2015年4月以来の8,000ポイント超えとなり、外国人のフィリピン株売買動向は週次で(11~15日)で74億ペソと高水準の買い越しを記録。ドル/ペソは再び1ドル=47ペソを割り込んで46.80ペソレベルで15日の取引を終了した。

18日の週は前週からのリスクオンの流れが続き、ペソ高推移を予想したものの、急激な相場変動を嫌う当局の動きが意識され、ECB、FOMC、日銀といったイベント前にドルが買い戻された。ドル/ペソは、FOMCの前に1ドル=47ペソを回復、FOMCの結果を受けて方向感を探りながらの取引となりそう。(現地時間28日8時現在)

■ 今月の見通し

フィリピンも8月は夏枯れ相場(GHOST MONTH)が到来すると言われている。そんな中、今月の注目は米金利の行方とフィリピン株式市場でしょうか。

7月27日のFOMCでは政策金利据え置きを決定。声明では、米国の実体経済は改善、景気見通しの短期的なリスク縮小、個人消費、雇用などを上方修正、などが盛り込まれ、やや楽観的な印象。

9月利上げの可能性が残され、主要通貨のファーストリアクションはドル買いだったが、一巡後はドル売りに。

利上げの可能性が残されたことはペソ安要因だが、この結果は想定内。

フィリピン株式市場は、2015年4月以来の8,000ポイント台へ上昇。外国人のフィリピン株売買動向は、9週連続の買い越しを記録。終値ベースの史上最高値である8,127.48ポイントは射程圏内。外国人の株買い継続、8,000ポイント台での足固めが出来るかに注目。とはいえ、史上最高値更新→達成感+夏枯れ相場を材料に利益確定の売り→下落、というシナリオはイメージしやすい。事実、史上最高値を前にして既に利益確定の売りが出ており、上値重く、足踏みが続く。

ペソ金利市場は、BREXIT後にドル調達圧力の高まりで、為替スワップマーケットの短期金利は1か月ものが1%ポイント近く低下したが、現在はBREXIT前の水準にほぼ戻し、相場は落ち着いている。

ドゥテルテ新政権の施政方針演説に経済界は好意的な反応。グローバルなリスクオン・オフの流れに抗えないが、市場が落ち着いていればドルペソ相場はペソ高に推移すると思うのだが…。(現地時間28日8時現在)

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』
赴任して一か月半、住む部屋も決まり、家族合流、生活が落ち着いてきました。

小職、部屋探しは好きなんです。これからの生活を想像しながらワクワク。部屋探し中、当地ってバスタブがない部屋が多いことを知りました。フィリピン・日本人あるあるかな?、なんて思ったものです。

風呂に浸かりたい、バスタブは大きいほうがいい、日本人の部屋選びはそれが重要な要素、なんて当地の不動産屋さんに言われました。

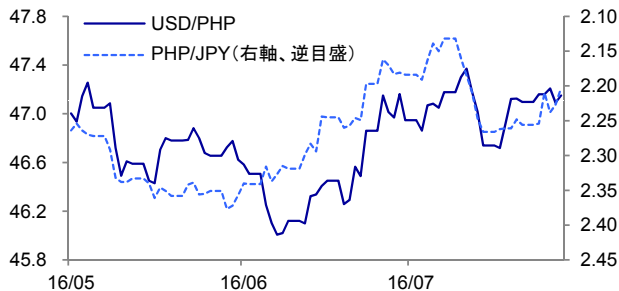
確かにそうだ、小職の息子は風呂好きだ、バスタブがあればベターだなあ〜、と思い物件めぐり。

と、ある部屋、ユニットバス半分のバスタブ。どうやって浸かるの?、体育座り??…
だったらいらないかあ〜??

そんな現在の小職の部屋は“普通”のバスタブはあるが、蛇口がない。
風呂を溜めるときはシャワー。入居してから気づきました。

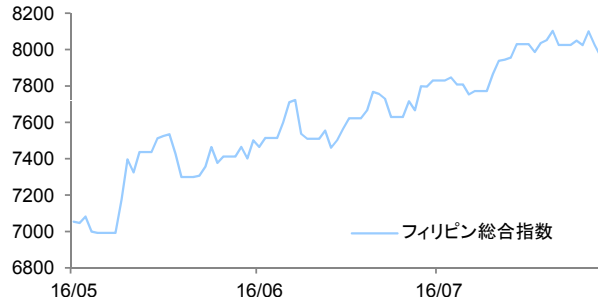
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	CPI (前年比)	6月	1.9%	1.9%	1.6%
7/7	外貨準備高	6月	-	840億ドル	829億ドル
7/12	輸出 (前年比)	5月	-2.4%	-3.8%	-4.1%
7/15	OFW送金額	5月	-	21.9億ドル	22.1億ドル
7/15	OFW送金 (前年比)	5月	4.8%	1.9%	4.1%
7/26	貿易収支	5月	-15億ドル	-20.2億ドル	-23.1億ドル

(資料) ブルームバーク

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 66.00 ~ 68.50
INR/JPY 1.50 ~ 1.59

アジア・オセアニア資金部 木原 達章

■ 先月の為替相場

7月のルピー相場は、67台半ばで始まった後、一時67割れまで買われる局面があるも、その後は67台前半でレンジ推移。

先月6月18日に、インド準備銀行(RBI)のラジャン総裁が3年間の任期が満了する9月4日で退任することが発表され、ルピーは対ドルで、一時、68近辺まで下落。更に英国の国民投票がEU離脱(Brexit)との結果となると、68.2台まで下落。

その後、マーケットは次第に落ち着きを取り戻し、ルピーにも買い戻しが入り、7月に入ってからその傾向は継続。Brexit決定のインパクトが次第に薄れ、グローバルにリスクセンチメントが回復。株価が強含む中、14日には66台までルピーは買い戻された。その後は、67台前半で揉み合い。

経済指標は、12日のインド市場引け後に、印5月鉱工業生産、印6月消費者物価指数(CPI)が発表されたが、鉱工業生産は市場予想前年比(▲0.3%)に対し、同+1.2%と予想を大きく上回ったが、水準的には低調。また6月に発表された4月分の数字は下方修正された。CPIは市場予想通りの同+5.8%。前月と同じ水準で市場の反応は限定的。

18日には、国会が開会。物品・サービス税(GST)法案が成立するか否かが注目されている。

■ 今月の見通し

8月のルピー相場は、引き続き、米国の利上げ動向等外部要因に左右され易い展開を予想。また、ラジャン総裁の後任人事、国会でのGSTの審議にも注目が集まると思われる。

ラジャン総裁の後任については、ラジャン総裁がインフレファイターとして市場から認知されていたのに対し、政府の圧力もあり、インフレ抑制よりも経済成長に重点を置く人物が有力との報道もあり、実現した場合には、ルピーへの下押し圧力となる。

原油価格は一旦頭打ち、モンスーン(雨季)はスタートが前年よりも遅れたものの、今のところ順調な模様。インドの景気・インフレ双方への影響が大きい両者には注視が必要。

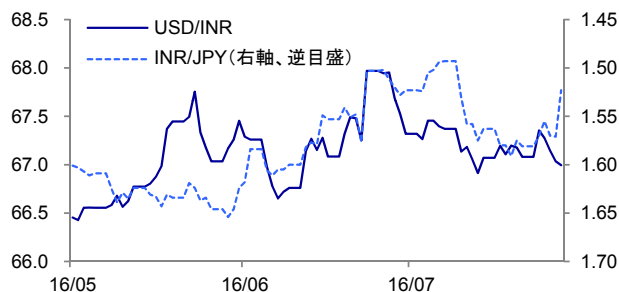
インド経済は内需主導の経済であり、Brexitの影響は他のアジア諸国対比相対的には大きくないと思われる。今年のモンスーンは例年を上回ると予想されていることに加え、第7次中央公務員給与委員会の勧告を受けた公務員給与の引き上げが8月にあり、家計消費は徐々にしっかりとっていくと予想。インフレ上昇が顕現化しない限り、RBIによる追加利下げ余地もあり、ルピーは相対的にしっかりとした値動きになると予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお風呂事情』
基本的には大きなバケツにお湯をためての沐浴になる。ついていても水シャワーということも。それなりの家賃のアパートや家だとシャワーもお湯になり、日本人に慣れている大家さんの中には「日本人には必要でしょ。」とバスタブを置いてくれる人もいるという。筆者の場合、大家に「シャワーをつけてくれ。」と頼んだら、室内の水タンクから出ている管にそのままシャワーヘッドを取り付けられた。呆然と見上げている不動産業者と筆者を不思議そうに見ていた大家を思い出す。まあ、酷暑期に使うにはいいかもしれないが。しかし、他の時期にはお湯を使いたいので、やはりバケツにお湯をため、それで身体を洗う。世界に冠たる風呂好きの日本人としては、時に国外逃亡したい衝動に駆られる。ではインドの人たちが身体の清潔さに無関心なのかというと、そうではない。バケツ一杯の水で、頭から足先まで洗っている光景を時々見る。それも歩道の上で。彼らの家の前といえばそうなのだが、車道側から見ると歩道の上である。真っ白なきめ細かい泡を立てながら、周囲をまったく気にせずしゃがみこんで無心に頭を洗っている彼の隣家では、主婦であろう女性が薪に火をつけて鍋で朝食を作っていたりする。繰り返すが、歩道の上である。水は朝と夕方の一、二回配水され、各戸はタンクにためて使う。日本とは異なり、いつでも無制限に使えるわけではない。その配水も受けられないエリアは、以前は配水車が廻っていたが、今は路上に置かれている黒い水タンクからプラスチックの甕(かめ)に汲んで使っているようだ。水事情が悪さから考えると、とりあえず身体を洗えるということで満足すべきなのかもしれない。(チェンナイ支店 近藤)

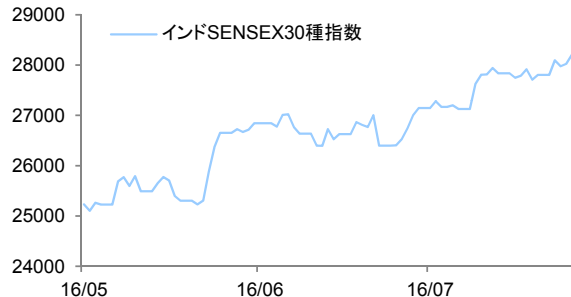
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

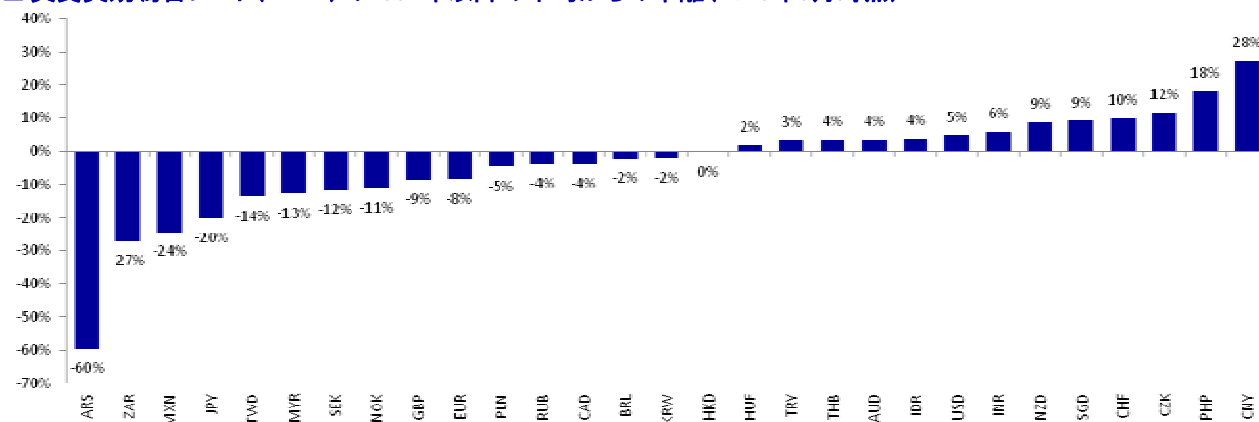
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	日経インドPMI製造業	6月	-	51.7	50.7
7/5	日経インドPMIサービス	6月	-	50.3	51.0
7/5	日経インドPMIコンポジット	6月	-	51.1	50.9
7/12	鉱工業生産(前年比)	5月	-0.3%	1.2%	-1.3%
7/12	消費者物価指数(前年比)	6月	5.79%	5.77%	5.76%
7/14	卸売物価(前年比)	6月	1.20%	1.62%	0.79%
7/15	貿易収支	6月	-\$ 6.5B	-\$ 8.1B	-\$ 6.3B
7/15	輸入(前年比)	6月	-	-7.3%	-13.2%
7/15	輸出(前年比)	6月	-	1.3%	-0.8%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2015年末	2016年7月末	騰落率	株式市場	2015年末	2016年7月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17425.03	18432.24	5.8%	-
日本	USD/JPY	120.22	102.06	-15.1%	日経平均株価	19033.71	16569.27	-12.9%	2.5%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0862	1.1174	2.9%	ドイツDAX指数	10743.01	10337.5	-3.8%	-3.8%
英国	GBP/USD	1.4736	1.323	-10.2%	ロンドンFTSE100指数	6242.32	6724.43	7.7%	20.0%
豪州	AUD/USD	0.7286	0.7596	4.3%	S&P/ASX200指数	5295.9	5562.358	5.0%	0.7%
カナダ	USD/CAD	1.3839	1.303	-5.8%	S&Pトント総合指数	13009.95	14582.74	12.1%	19.0%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.4937	6.635	2.2%	上海総合	3539.182	2979.339	-15.8%	-17.6%
香港	USD/HKD	7.7507	7.7575	0.1%	香港ハンセン	21914.4	21891.37	-0.1%	-0.2%
インド	USD/INR	66.1537	66.995	1.3%	インドSENSEX30種	26117.54	28051.86	7.4%	6.1%
インドネシア	USD/IDR	13788	13112	-4.9%	ジャカルタ総合	4593.008	5215.994	13.6%	19.4%
韓国	USD/KRW	1175.06	1120.24	-4.7%	韓国総合株価	1961.31	2016.19	2.8%	7.8%
マレーシア	USD/MYR	4.2943	4.066	-5.3%	ブルサマレーシアKLCI	1692.51	1653.26	-2.3%	3.2%
フィリピン	USD/PHP	46.905	47.15	0.5%	フィリピン総合	6952.08	7963.11	14.5%	13.9%
シンガポール	USD/SGD	1.4185	1.3397	-5.6%	シンガポールST	2882.73	2868.69	-0.5%	5.4%
台湾	USD/TWD	32.862	31.953	-2.8%	台湾加権	8338.06	8984.41	7.8%	10.8%
タイ	USD/THB	36.03	34.777	-3.5%	タイSET	1288.02	1524.07	18.3%	22.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2016年6月時点)



■ 実質GDP成長率

	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2014	2015
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.3	2.0	2.6	2.0	0.9	0.8	1.2	2.4	2.4
日本*	2.1	5.2	-1.7	1.7	-1.8	1.9		0.0	0.6
ユーロ圏	1.0	1.3	1.6	1.6	1.7	1.7	1.6	0.9	1.7
英国	3.5	2.9	2.3	2.0	1.8	2.0	2.2	3.1	2.2
豪州	2.3	2.3	2.1	2.7	2.9	3.1		2.7	2.5
カナダ*	3.4	-1.0	-0.5	2.2	0.5	2.4		2.5	1.1
エマージングアジア									
中国	7.2	7.0	7.0	6.9	6.8	6.7	6.7	7.3	6.9
香港	2.5	2.4	3.1	2.3	1.9	0.8		2.7	2.4
インド	6.6	6.7	7.5	7.6	7.2	7.9		7.2	0.0
インドネシア	5.0	4.7	4.7	4.7	5.0	4.9		5.0	4.8
韓国	2.7	2.4	2.2	2.8	3.1	2.8	3.2	3.3	2.6
マレーシア	5.7	5.7	4.9	4.7	4.5	4.2		6.0	5.0
フィリピン	6.7	5.0	5.9	6.2	6.5	6.9		6.2	5.9
シンガポール	2.8	2.7	1.7	1.8	1.8	2.1	2.2	3.3	2.0
台湾	3.6	4.0	0.6	-0.8	-0.9	-0.7	0.7	3.9	0.7
タイ	2.1	3.0	2.7	2.9	2.8	3.2		0.9	2.8

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	15/12	16/01	16/02	16/03	16/04	16/05	16/06	2014	2015
	(%)							(%)	
先進国									
米国	5.0	4.9	4.9	5.0	5.0	4.7	4.9	6.2	5.3
日本	3.3	3.2	3.3	3.2	3.2	3.2	3.1	3.6	3.4
ユーロ圏	10.5	10.4	10.3	10.2	10.2	10.1	10.1	11.6	10.9
英国	5.1	5.1	5.1	5.1	5.0	4.9		6.3	5.4
豪州	5.8	6.0	5.8	5.7	5.7	5.7	5.8	6.1	6.1
カナダ	7.1	7.2	7.3	7.1	7.1	6.9	6.8	6.9	6.9
エマージングアジア									
中国	4.1			4.0				4.1	4.1
香港	3.3	3.3	3.3	3.4	3.4	3.4	3.4	3.2	3.3
インドネシア								5.8	6.0
韓国	3.5	3.5	4.1	3.8	3.7	3.7	3.6	3.5	3.6
マレーシア	3.4	3.4	3.4	3.5	3.5	3.4		2.9	3.2
フィリピン		5.8			6.1			6.8	6.3
シンガポール	1.9			1.9			2.1	2.0	1.9
台湾	3.9	3.9	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8
タイ	0.7	0.9	0.9	1.0	1.0	1.2	1.0	0.8	0.9

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	16/01	16/02	16/03	16/04	16/05	16/06	16/07	2014	2015
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	1.4	1.0	0.9	1.1	1.0	1.0		1.6	0.1
日本	0.0	0.3	-0.1	-0.3	-0.4	-0.4		2.7	0.8
ユーロ圏	0.3	-0.2	0.0	-0.2	-0.1	0.1	0.2	0.4	0.0
英国	0.3	0.3	0.5	0.3	0.3	0.5		1.5	0.0
豪州			1.3			1.0		2.5	1.5
カナダ	2.0	1.4	1.3	1.7	1.5	1.5		1.9	1.1
エマージングアジア									
中国	1.8	2.3	2.3	2.3	2.0	1.9		2.0	1.4
香港	2.5	3.0	2.9	2.7	2.6	2.4		4.4	3.0
インド	5.7	5.3	4.8	5.5	5.8	5.8		6.4	5.9
インドネシア	4.1	4.4	4.5	3.6	3.3	3.5		6.4	6.4
韓国	0.8	1.3	1.0	1.0	0.8	0.8		1.3	0.7
マレーシア	3.5	4.2	2.6	2.1	2.0	1.6		3.2	2.1
フィリピン	1.3	0.9	1.1	1.1	1.6	1.9		4.1	1.5
シンガポール	-0.6	-0.8	-1.0	-0.5	-1.6	-0.7		1.0	-0.5
台湾	0.8	2.4	2.0	1.9	1.2	0.9		1.2	-0.3
タイ	-0.5	-0.5	-0.5	0.1	0.5	0.4		1.9	-0.9

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2014Q3	2014Q4	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2014	2015
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.1	-2.2	-2.3	-2.4	-2.5	-2.5	-2.6	-2.3	-2.6
日本	-0.1	0.5	1.8	2.4	2.9	3.3	3.6	0.8	3.3
ユーロ圏	2.3	2.4	2.7	2.9	3.1	3.2	3.2	2.5	3.2
英国	-5.0	-5.1	-4.8	-4.9	-4.9	-5.4	-5.7	-4.7	-5.4
豪州	-3.3	-2.9	-3.5	-5.3	-4.8	-5.5	-5.1	-3.0	-4.8
カナダ	-2.3	-2.3	-2.6	-2.8	-3.1	-3.2	-3.1	-2.3	-3.2
エマージングアジア									
中国	1.8	2.7	3.3	3.2	3.0	3.0	2.6	2.7	3.0
香港	1.5	1.3	1.3	2.6	3.1	3.1	3.8	1.3	3.1
インド	-1.2	-1.4	-1.3	-1.3	-1.1	-1.1	-1.1	-1.4	-1.1
インドネシア	-3.0	-3.1	-3.0	-2.5	-2.2	-2.1	-2.1	-3.1	-2.1
韓国	6.1	6.0	6.7	7.0	7.7	7.7	7.9	6.0	7.7
マレーシア	5.3	4.4	3.5	2.7	2.5	2.9	2.4	4.4	2.9
フィリピン	3.6	3.8	4.2	3.8	2.9	2.9	2.3	3.8	2.9
シンガポール	18.5	17.4	19.3	19.5	19.3	19.8	18.9	17.5	19.8
台湾	11.9	12.2	13.3	13.2	14.2	14.5	14.4	11.9	14.5
タイ	2.2	3.8	4.5	6.0	7.9	8.1	10.4	3.8	8.1

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.25 - 0.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2015/12/17	25	2016/7/28	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2016/7/29	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2016/7/21	現状維持
英国	バンク・レート	0.50	緩和: 2007/12/6	5.75	2009/3/5	-50	2016/7/14	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.75	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/5/3	-25	2016/7/5	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2016/7/13	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
香港	基準貸出金利	0.50	緩和: 2007/9/19	6.75	2008/12/17	-100	2011/12/14	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	緩和: 2015/1/15	8.00	2016/4/5	-25	2016/6/7	現状維持
インドネシア	翌日物金利	6.50	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/6/16	-25	2016/7/21	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2016/7/14	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2016/7/13	-25bp
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2016/6/23	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2016/6/22	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行